



[事務局からのお知らせ]

彙報

10月3日の評議員会における決定事項及び諸報告は次の通り。

[議決事項]

- (1) 平成14年度決算及び平成15年度予算案承認
- (2) 平成15年度事業計画承認
- (3) 平成15年度日本中国学会賞決定
諸田 龍美
「好色の風流—『長恨歌』をささえた中唐の美意識—」
〔学会報〕第54集掲載
- (4) 次年度大会開催校は、二松学舎大学(平成16年10月9日・10日)に決定。

10月4日の総会において、評議員会の議決事項が報告され、了承されました。

◎会費納入について

会費未納の方は、至急ご送金願います。なお、4年間滞納されますと除名になりますのでご注意ください。

郵便振替口座：00160-9-89927

◎『学会報』送付停止について

平成14年度会費未納の方には、本年度の『学会報』を送付いたしておりません。会費納入が確認され次第、送付いたします。会費納入の際には、振替用紙通信欄に未送付の『学会報』号数をご記入ください。

◎住所変更について

会員数の増加に伴い、四年会費未納による退会会員・住所不明会員が急増しております。住所・所属機関等の変更、ならびに退会の際は、速やかに事務局までご通知ください。通知は書面もしくはFAXにてお願いします。振替用紙通信欄をご使用いただいても結構です。

第二回日本漢学国際学術討論会に参加して

理事長 興膳 宏

二〇〇三年十一月七日・八日の両日、台湾大学日本語文学系の主催で、第二回日本漢学国際学術討論会（「討論会」は、中国語では「研討会」）が行なわれ、私も招かれて参加した。日本から赴いた参加者は、私のほかに、川合康三（京都大学）・後藤昭雄（大阪大学）・蔡毅（南山大学）・中嶋隆蔵（東北大学）の諸氏である。

ところで、いまこの一文を草するに当たって、はたと当惑したのは、この「日本漢学」ということばの意味である。我々日本人も同じ「漢学」の語を用いているので、何となく感覚的に分かったような気になるのだが、実はかなりやっかいな事情がある。たとえば辞書で「漢学」という項目を引くと、『広辞苑』では「日本で、一般に中国の儒学または中国の学問の総称」という解釈があり、他方『日本国語大辞典』では「わが国で、伝統的な中国文化すべてを研究対象とする学問の総称」という定義があって、両者の間に微妙なズレが感じられる。また、わが『日本中国学会報』の学界展望（文学）には、「日本漢文学」という分野があって、これは日本人によって創作された漢詩文を対象としており、これまた上記のような辞書の定義ではカバーしきれない。

一方、中国語の「漢学」は、もっぱら外国人による中国研究（シノロジー）を指していて、日本語の「漢学」との間には大きな落差が認められる。日本語と中国語で同一の語彙を用いていて、しかも意味にズレがある場合、お互いに自国語の概念で理解しながら相手にも通じたつもりでいるが、実は誤解もはなはだしい結果になりかねない。我々はその点に十分慎重であるべきだろう。

さらに、今度の討論会に参加して気づいたことだが、台湾の学界で用いられている「漢学」には、大陸で用いられるそれとはまたニュアンスを異にする

独特の意味があるようだ。それが、この討論会でなされた各報告にもよく反映していた。結論を急ぐといえば、今回の討論会の「日本漢学」には、どうやら二重の意味が含まれていそうである。その第一は、日本人による中国研究という概念であり、これは中国語でいう「漢学」の通常の意味に重なる。その第二は、漢語によって記された近代に至る日本人の著作という意味で、日本語の「日本漢文学」にきわめて近いところがある。この両者が分かちがたく併存しているところに、台湾の学界における「日本漢学」の特色があるのではないか。その際、この討論会の主催者が台湾大学の中文系ではなく、日文史系であることにも留意する必要がある。

そのことを具体的に理解してもらうために、ここで討論会のプログラムを示しておくことにしよう。各報告は中国語あるいは日本語でなされたが、いま便宜上、すべての演題を日本語訳にして掲げる。なお、当日の欠席者については割愛する。

十一月七日（金）

興膳宏「平安朝漢詩人と唐詩」（基調講演）

張宝三「清原宣賢《毛詩抄》の研究—《毛詩注疏》との関係を中心に」

楊儒賓「伊藤仁齋と戴震の思想の再考察—儒家經典解釈学の観点に着目して」

劉長輝「山鹿素行の「聖学」と「至道」

蔡毅「長崎清客と江戸漢詩—新発見の江芸閣・沈萍香の書簡初探」

徐興慶「隠元禪師と朱舜水—近世中日文化交流の再解釈」

川合康三「中国文学史の誕生—二十世紀日本における中国文学研究の一側面」

陳明姿「〈源氏須磨退居記〉における中国の史

書と文学の受容

十一月八日(土)

ジョシュア・フォーゲル「二十一世紀初めにおける内藤湖南と内藤史学の再検討」

(基調講演、代読)

後藤昭雄「大江匡房の〈詩境記〉—十一世紀日本人による中国詩略史」

朱秋而「六如上人と南宋詩」

ジェームス・マックモラン「徳川時代初期の孔子崇拜」

中嶋隆蔵「二十世紀後半の日本における孔子研究」

陳瑋芬「井上哲次郎の「忠孝」の義理新解—《勅語衍義》に関する考察」

張崑將「明末における《孝経》熱と日本陽明学の展開」

金培懿「近代日本学者の儒学再考の意味するところ」

廖肇亨「木庵禅師の詩歌に描かれる日本のイメージ—富士山と僧侶像讀を中心に」

これはまさしく日本シノロジーと、日本語でいう「日本漢学」とのアンサンブルである。しかも、どちらかといえば後者の方にスタンスが移っている感さえあり、さらにむしろ「日本学」の領域に属するようなテーマもある。この辺りは、日文学の主権という事情も大いに与っているのかも知れない。その意味で、仮に大陸中国で同名の学術討論会が開催されるにしても、これとはずいぶん趣のちがったものになるのではないかと想像する。

私には個々の報告について論評を加えるだけの能力も資格もないが、全体的な印象をいえば、日本人学者の報告はさておくとして、台湾の学者の論考には、取り上げる対象にしてもテーマにしても、日本の学界とはかなりの問題意識のちがいが感じられた。たとえば、山鹿素行、隠元禅師、木庵禅師、井上哲次郎といった人々に対して、今日どれだけの日本の研究者が日本思想史あるいは儒学史の課題として、真剣に取り組もうとしているだろうか。また、張宝三氏が取り上げた清原宣賢や「毛詩抄」は、国語学



の領域でこそいわゆる「抄物」として資料的価値が重んぜられてはいるものの、その本来の役割である経学解釈史の資料としては、ほとんどの経学研究や思想史研究者がその意義に注意を払っていないのが現状である。これらのことについては、いずれ台湾の学者から大いに教えられるべき成果がもたらされるかも知れない。

この学術討論会を主催した台湾大学日本語文学系は、いま五十一を数える台湾大学の諸系（日本の大学の学部に対応する）の中でも、比較的新しく、一九九四年に創設されたというから、十年未満の歴史しか持っていない。しかし、その気宇はまことに壮大で、このたびの学術討論会をはじめとして、国際交流に積極的に乗り出している。学生にも人気のある系だということから、その将来はおそらく刮目して期すべきものがある。

いま一つ忘れてならないことは、今回の計画を背後から支えた台湾大学「東亜文明研究センター」の存在である。ここにいう「東亜」とは、類似する概念でいえば、東アジア漢字文化圏というに近いが、このセンターの存在には、台湾を発信地とする文化的戦略の意味が大きい。これは政府の強いバックアップによって、ごく最近発足した大型プロジェクトであり、人文学の研究拠点形成を旨とするものである。そうした大きな流れの中で、今回の日本漢学国際討論会も開催されたといったらよからう。

日本中国語学会

中川 正之 (神戸大学)

本会の沿革

- 1946年10月20日 「中国語学研究会」設立。京都帝大文学部で第1回例会が行われる。
- 1947年3月 会誌『中国語学』第1号発行。
- 1949年1月 会誌を『中国語学研究会会報』と変更。
- 1952年11月 会則制定。
- 1955年1月 会誌を『中国語学』と変更。
- 1978年11月 学会名を「中国語学会」と変更。
- 1989年10月 学会名を「日本中国語学会」と変更、現在に至る。
- 2000年10月 日本中国語学会奨励賞を創設。
(慶谷壽信・水谷誠「学会小史」『中国語学』245号を参照)

会員総数 (2003年10月20日現在)

総会員数1,167名 (うち顧問4名, 名誉会員26名, 通常会員1,137名)。賛助会員21社。

役員 (2002~2003年度)

(理事長) 中川正之, (常任理事) 相原茂・荒川清秀・木村英樹・輿水優・佐藤晴彦・杉村博文・平井勝利, (編集委員長) 荒川清秀, (編集委員) 遠藤光暁・佐藤進・杉村博文・古屋昭弘, (理事) 70名。

本会の趣旨と活動

中国語学・文学の研究と内外関係諸機関および会員相互の連絡を図ることを目的とし, 次の事業を行っている。

1. 毎年1回全国大会及び総会の開催 (秋季)。
2. 月例研究会及びその他の会合。
3. 会報 (『中国語学』年1回) その他刊行物 (『ニューズレター』年2回, 『会員名簿』隔年) の

発行。

4. 内外関係諸機関との連絡。
5. その他必要な事業。

第53回全国大会は, 2003年10月25日・26日に早稲田大学大隈大講堂及び戸山キャンパスで行われた。初日シンポジウム「漢字音研究の現在」のプログラムは以下の通りである。

はじめに (早稲田大学 古屋昭弘)

日本呉音 (関西学院大学 小倉肇)

日本漢音 (広島大学 沼本克明)

朝鮮漢字音 (高麗大学 鄭光)

以上 司会 (創価大学 水谷誠)

越南漢字音 (大連理工大学 清水政明)

水語漢字音 (南開大学 曾曉淪)

質疑応答

以上 司会 (青山学院大学 遠藤光暁)

第2日目分科会研究発表は, 語法・語彙部会が45件, 音韻・方言部会が9件, 教育・教育法開発部会が7件あった。

なお, 来年度の第54回全国大会は京都大学で開催される予定である。

その他, 関東支部が全国大会開催月を除き毎月例会を開催しており, 東海支部が年数回の例会を開催している。

2003年10月25日発行『中国語学』250号は総頁数304頁で発行部数1500部, 掲載論文は依頼が4本, 投稿が13本であった。掲載論文と執筆者を採録しておく。

「新聞标题句中的过程状态」

史 有為

「詞曲の押韻から見た「大」字二音の変遷」

平山 久雄
『説文解字繫伝』にみられる反切下字混用
一梗撰入声と曾撰入声、および外転一等韻と二等
韻の間の—
東ヶ崎 祐一
「撰一対応と周遍対応および偏向指示」

杉村 博文
「摹物状語的引申及主観化渠道」 戸 建
「“从A到B VP” 構文再考」 雷 桂林
「中国語における数量詞の意味と機能—二重目的
語文を中心として—」 今井 俊彦
「動詞の前後に位置する起点と経過点」

鳥村 典子
「“領主属宾句”における領属の認知的解釈」

勝川 裕子
「“是(一)个N”の認知言語学的アプローチ」

安井 二美子
「“哪儿”と“什么地方”—空間表現の特指疑問文—」

中島 吾妻
「副詞“才”の取り立て機能について—“就”との比
較から—」 井田 みずほ

「〈ヒト〉と〈モノ〉の対立」 西 香織
「現代中国語における文法範疇としての典型例外」

鈴木 慶夏
「インタラクションの文法、帰属の文法」

定延 利之
「[“のだ”文と“的”構文] 井上 優

「学会レポート：パネル・ディスカッション「隣
接領域から見た中国語学」 木村 英樹

2002年度には『日本の中国語教育』(好文出版)を
刊行している。

学会奨励賞

本学会創立50周年を記念して学会奨励賞が創設さ
れ、前年度発行の『中国語学』掲載論文の中から優
秀なものに授与されている。受賞者は以下の通りで
ある。

第1回：2000年度受賞(246号掲載論文)

松江 崇 「『六度集経』『仏説義足経』におけ
る人称代詞の複数形式」

山田 忠司 「『儒林外史』における“給”の
用法」

第2回：2001年度受賞(247号掲載論文)

曹 泰和 「反語文の“不是……(吗)？”につ
いて—日本語と比較しながら—」

第3回：2002年度受賞(248号掲載論文)

関 光世 「“V給”文の意味特徴に関する考
察」

第4回：2003年度受賞(249号掲載論文)

三木 夏華 「北部呉語の授受構文に見られる
介詞の史的変化」

学会ホームページ

本学会のホームページ(<http://www.soc.nii.ac.jp/clsj/index.html>)が開設され、学会会則、大会プログラ
ム、例会プログラム、投稿規程、事務局住所などが
記載されている。

問題点と展望

ホームページ開設は「より開かれた学会」への大
きな方向転換と考え、入会時に必要な「現会員2名
による推薦」の条項を削除するなど会則や内規の整
備を行っているが、なお不十分な点は少なくない。
組織の急拡大・多様な会員に対応する規則・大会開
催手順・会誌掲載論文の審査基準などの明確化、マ
ニュアル化が急務である。

科学研究助成金の審査領域が「中国文学」から「言
語学」に変更された。中国語が言語学の低位領域と
位置づけられたと言つてよい。この動きは学界の
様々な変化に連動する可能性が強い。それだけにい
っそう中国語語学固有の問題を扱う研究が理論的つ
まり普遍的傾向の強い研究に比して不利な扱いを受
けないのか注意が必要である。本会の会員には、他
言語研究者や一般言語学研究者にも理解される言葉
で語ることがますます強く求められることになる。

2004年度からの理事長に金沢大学の岩田礼氏が就
任される。岩田氏は国際中国語学会の運営にも深く
関わっておられる。日本の中国語学研究が、世界と
連携し、世界的な研究動向の中で位置づけられると
いう意味でも大きな転換点をむかえるであろう。

紹介：「関西中国女性史研究会」の歩みと 『ジェンダーからみた中国の家と女』などについて

笥 久美子（神戸大学名誉教授）

近年、日本でも中国学研究を志す若い女性が増えた。とはいえ、その数は分野によって、かなりのバラツキがあり、なお相対的または絶対的少数というケースもあって、孤立状態で研究する人も決して少なくはない。そうしたことも念頭にあって、情報交換とお互いの問題意識をフランクに語り合う場を作りたいと考えたのが、おぼろな記憶だが、十年近くも前のことであった。かくて関西在住の若い人たちとフリーな研究会を始めたのが、やがて表記のような研究会に成長したのである。それも若い世代の有能な女性研究者が積極的な活動を展開するようになったおかげで、まことに今昔の感がある。

当初は、文学分野の数人だけで、それぞれが自分の抱えているテーマについて発表し、参加者と議論するといったささやかなものであったのだが、それでも各自が所属する機関の紀要や、さらに全国性的の研究誌「女性史学」（女性史総合研究会）に、その成果を発表するなどの経験が積み重なって、少しずつだが研究会の進むべき方向が見えてきたのだった。

その後、東洋史、社会学、考古学などを研究対象とする隣接領域からの参加者も増えてきたので、ひろく女性の諸問題を取り上げ研究・討論できる可能性を活かすべく、「中国女性伝記研究会」と名づけて、年に数回の研究会を、楽しみながら自由な雰囲気で行ってきた。

以上が前史であるとするれば、標題に記した「関西中国女性史研究会」（東京には早くから続けられている中国女性史研究会があるので、「関西」と地域名を冠したのだが、参加者は関西のみでなく

名古屋からのメンバーも含む）と名乗って以後は、大きさに言えば、公的な研究会活動の「正史」時代に入ったということになる。平成13年度より、科研費の研究細目に「ジェンダー」部門が新設されたことによって、標題にかかげた名義により科研費を申請したこと、それが認定された結果、研究テーマもいよいよ広域かつ多彩で活気に富むものになった、といえるからである。以下に科研費の助成を受けた研究テーマと活動の概略について、述べておくことにしよう。

13年度～14年度 研究代表 野村鮎子（奈良女子大学）

テーマ：

「ジェンダーからみた中国の“家”と“女”」
二年間の成果

*昨14年7月、奈良女子大学で、同テーマの国際シンポジウムを開催。

パネリストに鮑家麟アリゾナ大学教授・臧健
北京大学教授を招請し古代（午前）と近代（午後）の部に分けて、以下のテーマで報告を受け、討論を行った。

- ①「宋元から明清時代の家法が規定する男女の役割」（臧健）
- ②「古典文学における士大夫の「家」の中の女たち」（野村鮎子）
- ③「徐志摩の結婚と離婚」（鮑家麟）
- ④「民国時期知識人の家庭観—胡適の結婚」（西川眞子）

参加者は265名で予想を大幅に越えての盛会であった。これらについては「女性史

学」第13号（2003年年報）に詳細な記録がある。

- *中国学以外の研究者として、小山静子（教育学）、脇田晴子（日本史）、大沢正昭（東洋史）の三氏を招き、公開講演会（3回）を開催した。
- *研究会とシンポジュームの発表内容をもとに論文集『ジェンダーからみた中国の家と女』を編集、平成16年2月に出版の運びとなった。

今後についての計画を記すと、

平成15年度～17年度

研究代表 中山 文（神戸学院大学）

テーマ「中国文化におけるジェンダーの表象に関する研究」

- *平成16年度には、中国の演劇と女性をテーマにしたシンポジュームを開催する予定。

かくて、引き続き毎月一回の研究会を開催、また幸いにも少数ながら男性の参加も得られ、在日中の中国人研究者もしだいに増えて、会員数は30名を越えるに至った。今後も、さらに若い世代による、独自性をもったテーマ研究を行うメンバーが増えることを期待している。

さて、「日本中国学会」の会員を多く含む研究会でもあるので、わたしたちの研究目的にも少しく触れておきたい。中国の古今の文献（歴史・詩文・小説・戯曲・医書・教訓書など）を、ジェンダーの視点から読みなおしてみると、わたしたちには一体どんなことが見えてくるだろうか、というのが共通する出発点で、例えば、家と女、家と娘、母と子、世間と女、芸術と女など、従来あまり具体的に扱われることのなかった視点からの分析に、新しく迫ってみようとしているのである。こうした問題意識のもとに「中国」を読み、かつ考えると、いろいろと面白い発見があるもので、研究会はますます活気に満ち、楽しいものになっ

てきている。今後はさらにこうした問題にも取り組む若い研究者が増えるに違いないと確信しているのだが、その初歩的試みとして編んだ、近刊『ジェンダーからみた中国の家と女』（東方書店）について、多くの方々の積極的なご批判を期待したい。



宋词研究会の設立と第一回研究会の開催

萩原 正樹 (小樽商科大学)

宋词研究会の設立

2003年6月、有志八名(明木茂夫、池田智幸、小田美和子、高田和彦、萩原正樹、保町佳昭、松尾肇子、村越貴代美)が発起人となり、宋词研究会を設立した。

「漢文唐詩宋詞元曲」という言葉もあるように、詞は宋代を代表する文学として、言うまでもなく非常に重要な中国韻文のジャンルである。その作品は、晩唐五代兩宋はもちろん、元明代にも続き、さらに清代には再び活況を呈して、近現代にまで創作されつづけている。詞は、歴代中国文人の創作活動や教養にとって、欠くべからざる分野として確固たる地歩を占めているものと言えよう。その研究についても、中国では続々と新たな成果が生み出され、日本においても、故中田勇次郎先生のお仕事をはじめ、村上哲見先生、青山宏先生、佐藤保先生の御著書など、多くのすぐれた業績が残されている。ただなお日本では、詩や小説等と比べ研究者数も少なく、一般にもあまり知られていないのが現状であろう。

近年、日本の中国学界でも各時代やジャンルごとに多くの学会・研究会が設立、開催され、活発に研究が行われている。我々は、詞においても互いの交流や意見交換などを通して切磋琢磨できる場の必要性を痛感し、宋词研究会を設立した次第である。

名称に「宋词」を冠してはいるが、最も隆盛した時代として宋を代表させたのみで、もとより唐五代、元明清、近現代、さらには域外の作品や理論等も研究対象となる。また、詞を理解するためには、当然のことながら、詩や楽府、散曲など、他の韻文ジャンルとの関わりも視野に入れておかねばならないと考えている。

以上のような趣旨で、我々にとっては近しい先達である中唐文学会、宋代詩文研究会の会員の方々を中心に参加を呼びかけたところ、多くの方々が入会を承諾してくださり、2003年10月現在、65名の方が会員として登録されるまでになった。詞に対する関心の高さを再認識して感謝すると同時に、当研究会へ寄せられる期待の大きさも感じ、身の引き締まる思いである。

活動内容

宋词研究会の活動は、現在のところ、研究会開催と雑誌発刊とを二本の柱としている。

研究会は、当面は年一回開催することとし、後述のように第一回研究会は盛會裡に終了した。

雑誌発刊については現在計画中であるが、中国で発刊されている『詞學』(《詞學》編輯委員會編、華東師範大学出版社刊)のような、論考や資料紹介、研究動向報告などを含む内容としたいと考えている。

またさらに、会員相互の勉強を目的として、龍榆生編『唐宋名家詞選』の読書会を開始し、その訳注の雑誌への連載も予定している。

読書会は本来、同じ場所に会員が集い、担当者の発表とそれに対する意見交換を行うものであろうが、全国各地に散らばっている会員が定期的に一箇所に集まるのは、非常に困難である。そこで我々は、次善の策として、訳注用のメーリングリストを開設し、E-Mailと添付ファイルの交換によって訳注作業を行っている。担当者が原稿ファイルをメーリングリストのアドレス宛に送ると、そのメールはメーリングリストの参加者全員に配信され、参加者は自分のパソコン内でそのファイルを開覧できる。原稿に対する種々の意見も、同様にメーリングリストのアドレス宛に送れば参加者全員に配信され、参加者相互の意見交換も簡単にできるのである。

メーリングリストを使って中国の作品を読み進めていくという試みは、まだ日本ではあまりなされていないかと思われる。パソコンを使うという制約上、漢字表示やファイル形式などさまざまな問題もあるが、試行錯誤を繰り返しながらも、着実に『唐宋名家詞選』訳注を進めていきたい。

第一回宋词研究会の開催

2003年9月20日(土)、慶應義塾大学日吉キャンパスにおいて、関係者各位の御尽力により、第一回宋词研究会を開催することができた。

当日は、午前10時半から会場をお借りしてまず『唐宋名家詞選』訳注の検討会を開き、活発な意見交換を行った。メーリングリスト上での議論では伝わりにくい細かな問題も、膝をつき合わせての討論ではお互いに理解を深めることができ、大変有意義であった。訳注はメーリングリストでの進行を基本とするが、顔を合わせて意見交換を行う場も貴重であり、年に一回の研究会においては今後も訳注検討会を開いていく予定である。

午後からのプログラムは、下記のとおりであった。

13:00～

記念講演

村上 哲見 先生 稼軒詞試論

14:00～

研究発表

1. 「六州歌頭」ノート

—「六州」から「六州歌頭」へ 池田 智幸

2. 詞論にみる『詞源』の受容 松尾 肇子

3. 宋詞を聴く—現代南方音と復元した楽譜によって

王迪・村越貴代美

4. 森川竹儀の詞論研究 萩原 正樹

5. 詞律分析システムの構築に向けて 村越貴代美

村上哲見先生には、わざわざ東京までお越しいたごき、記念の御講演を賜った。南宋・辛棄疾詞の宋詞全体の中での位置付けについて、「豪放派」などという単純な言葉では片付けられないことを、先生御自身の御研究歴や中国の学者との交流余話なども交えながら



説かれ、参加者一同大変興味深く拝聴した。やさしく穏やかにお話しくさる中に、はっとするような鋭い洞察と、一貫して底に流れる宋詞への熱い思いをひしひしと感じ、大きな感銘を受けた。

研究発表は五本あり、質疑応答の時間が少し足りない場面もあったが、詞牌、詞論、音楽、日本の詞学、データベースを用いた処理システムなど、各分野にわたる発表で非常に充実した内容であった。

研究発表終了後は、横浜中華街関帝廟正面の「荔香尊酒家」に会場を移して懇親会となり、歓談尽きぬうちに終了となった。

本「学会便り」に寄せられた各学会・研究会の記事でもしばしば触れられていることであるが、出身大学や世代の異なる同好の士との出会いは、それ自体非常に魅力的であり、極めて良質な刺激となる。学会というものの存在意義にはもちろんさまざまな面があるだろうが、例えば私などが学会に出席する理由を考えると、研究発表の内容への興味とともに、発表時間外での、関心を同じくするさまざまな方との出会いや、それによって受ける刺激を求めて、という面も大きいように思われる。日本中国学会は、もとよりそのような場の最も大きいものの一つであるが、このような機会はあるだけ多いほうが良い。

研究テーマの方向や距離はそれぞれ異なっても、同じく詞に関心を寄せる方々と語り、交流を深める場が誕生したことは、我々にとって何よりも大きな喜びである。

なお、来年度の第二回研究会は、愛知大学での開催を予定している。

以上、誌面をお借りして、宋詞研究会の設立と第一回研究会の開催について紹介させて頂いた。当研究会の活動によって、多くの方々が詞に関心を持ってくださり、研究の活性化と質の向上に少しでも効果を挙げることができるならば、望外の幸せである。今後とも皆様の御指導と御支援を心からお願い申し上げる次第である。

なお、宋詞研究会ホームページのURLは、<http://www.res.otaru-uc.ac.jp/~hagiwara/scyjh.html>、また入会御希望の方は、事務担当の萩原(E-Mail:hagiwara@res.otaru-uc.ac.jp)まで御連絡ください。

理論の話

森 由利亜 (早稲田大学)

私は、2001年5月末から2002年3月末までの約10ヶ月、アメリカ合衆国ロードアイランド州にあるブラウン大学に訪問研究者として滞在した。授業を担当するわけでもなく、週に二度、大学院の授業と学部の授業に聴講生として出席するという至って気軽な滞在である。大学院では宗教学のゼミナール、学部では儒教思想の授業を聴講させても頂いた。宗教学の講座では、教授が最初の授業時に配るシラバスのなかで指定した本を各自読み、それについて学生主体で論じ合い批評する。教授は基本的に司会である。このような形式は、やはり在米中に見学したインディアナ大学のJohn McRae ジョン・マックレー教授(禅学)やプリンストン大学のStephen Teiser スティーヴン・タイサー教授(中国中世仏教史)による大学院ゼミでも同じであった。

こうした授業に出て第一に驚かされるのが、院生たちの本を読むスピードである。タイサー氏の授業では、一回の授業に数冊の課題図書が課されており、ブラウン大での宗教学の授業でも、二週に単行本一冊と論文一本というのが平均的なペースであった。これは学部の授業においても言えることで、私の聴講した教室ではやはり半年に五冊程度の本を読む。日本の感覚からすれば充分「多読」に値するのではないだろうか。しかも、彼等は同時に(日本の学生ほど多くはないにせよ)いくつか授業をとっているわけであるから、やはり読書量は並大抵ではない。

彼等はどんな本を読んでいるのか。大学院で「多読」をするゼミナールは、どれも理論的な論著を読むことに主眼をおいていた。一例として、ある

教授による授業(中国宗教)で採りあげられた著作を下に挙げる。なお、これは1回の授業分の課題図書である。

J. J. M. De Groot, *The Religious System of China*. 6 vols, Leiden: E. J. Brill, 1885.

C. K. Yang (楊慶堃), *Religion in Chinese Society*, Waveland Press, Illinois, 1991.

James Watson, "Of Fresh and Bones: The Management of Death Pollution in Cantonese Society," in Maurice Bloch and Jonathan Parry, eds., *Death and the Regeneration of Life*. Cambridge Univ. Press, 1982.

Bloch and Parry, "Introduction," *ibid*.

David Johnson, ed., *Ritual Opera, Operatic Ritual*. Berkeley: Chinese Popular Culture Project, 1989.

Emily Ahern, *The Cult of the Dead in a Chinese Village*. Stanford: Stanford Univ. Press.

Gary Seaman, "The Sexual Politics of Karmic Retribution" in Ahern and Gatts, ed., *The Anthropology of Taiwanese Society*.

Evelyn Rawski and James Watson, eds., *Death Ritual in Late Imperial and Modern China*. Univ. of California Press, Berkeley, 1988.

この回は「死」を扱う授業であり、採りあげられているのは著者が実際に現地を訪れて取材した民俗誌的な著作が中心である。これだけ多くの単著・論文についてであるから、一々詳しく内容を解説している時間はない。それでも、手短かに個々の著作の要点を整理し、それまでの授業の過程で問題になってきたことに照らし合わせてゆくこと

で、学生たちはこれらをひとつと論じて行く。受講生は10名前後で、中国・韓国の学生と欧米系の学生で構成されている。日本人留学生はいない。ほとんど発言しない学生もいるにはいるが、本当によく読んできて発言の上で主導権を執るような学生がやはり数人おり議論は活発である。議論の過程で、これらの著作を扱う上での基礎知識を教授が確認する。例えば、楊慶堃の著作において提示された、中国宗教を拡散的宗教と組織的宗教の二面からとらえる日本でもよく知られる観点と、その観点の背景にある中国社会についての想定について確認がなされ、議論されていた。また、和訳もあるロウスキとワトソンによる著作については、ロウスキが執筆している「歴史家による中国葬礼の研究法」における歴史学的方法と人類学的方法の違い、対立が問題となった。この授業では、ロウスキ論文の巻頭に示されている人類学的方法に対する批判に賛同する発言が比較的多かったと記憶している。方法上の問題になると、実に呵責ない議論が展開される傾向があるようである。

実際、方法上の問題は大学の授業の中だけでなく、人事問題にまで及ぶ大きな議論を引き起こす。私の受け入れて下さったブラウン大学の宗教学科でも、方法上の問題が非常に深刻な対立へと発展していた。この場合の対立の一方の極にあるのは、宗教について人類普遍の宗教経験、宗教現象もしくは神秘経験というものを認めて、あらゆる宗教研究を畢竟この宗教経験のバリエーションとして見る（つまり人類にとって宗教は固有の分野であり、宗教学は固有の学たりうるとする）立場である。それを非常に強く批判するのが歴史学的な立場である。宗教はあくまでも歴史や文化の文脈の中で起こる事象であり、宗教経験という独自の領域を仮定して研究を始めることはできないとする。この両者が小さな所帯の中で学生をとりあい、片方が片方を完全に除外しようと強く運動しているのである。はじめのうちはよく分からなかったが

そのうちに事情が明らかになり、やや困惑したことは認めざるをえない。というのも、私の受け入れ先になって下さった先生は「経験派」で、学科の主任教授は徹底した「歴史学派」なのである。さらに、このような立場分け自体は自明なものとして、大学を超えて浸透している。

もちろん、経験か歴史かという方法上の問題は日本でも問題になることであり、論理的なレベルでの妥協は成立しない。私自身の方法は「歴史学派」で、論文の中に「経験」を持ち込むことはありえない。しかし、違う方法から得られる考察の結果やプロセスを参考にし、それを自分の観点から描き直すことは許されてしかるべきだと思うし、違う立場があった方が健全だと思う。また、「歴史学派」も原理的に徹底すると、「シャーマニズム」といった概念の便宜的使用すら許さなくなるようである。実際に、「歴史学派」の先生の授業でこの言葉を口に出したときにはひどく困った顔をされた。とはいえ、非当事者である私としては、短い滞在のなかで経験したこのような問題はなかなか興味深く、不謹慎ながら面白いと感じた次第であった。

その宗教学科でもやはり書評を中心とするゼミがあり、上記の問題とは関わりなく非常に面白かった。そもそも宗教学のゼミの聴講をすすめてくださったのは、ブラウン大学宗教学科で中国宗教の講座を担当している Harold Roth ハロルド・ロス教授である。ロス教授の専門は黄老思想であるが、私の滞在中は残念なことにその講座は休講であったので別の講座に出ることにしたのである。宗教学自体には以前から興味があったので、楽しみにして出かけていったが、実際に授業に出てみると最初はいかにも場違いな気がする。しかし、親切な教授や学生たちに囲まれて勉強するうちにとっても面白くなってきた。後で先述の他大の中国学の授業を参観してみると、そこでもいくつか同じ著作を採りあげていることを知った。要するに、

専攻が何であれ宗教を対象として研究する者が宗教学上の理論や争点を知っているのは当然という感覚があるものと思われる。とりわけ理論（セオリー）に対する関心は非常に高く、これは原典資料読解に大半の力を割く日本の比ではないような気がした。

このゼミで採りあげられた本の中でも、とりわけ印象に残ったのは Catherine Bell キヤサリン・ベルによる *Ritual Theory, Ritual Practice* (Oxford, 1992) である。ベルはサンタ・クララ大学の助教授で、もともとはシカゴ大学で中国の道教儀礼を専攻した学者である。しかし最近では儀礼理論に関する書物を著し、とりわけ本書は中国宗教のみならず宗教学理論や宗教儀礼に関する優れた論著としてよく紹介される。実際に、私が参観した他大学の授業でもベルの著作に言及しないものはなかった。

その内容は、19世紀末から最近に至るまでの宗教学、社会学、人類学、歴史学など、さまざまな分野の中でとりあげられる儀礼に関する議論を読み解き、それらの議論の展開と推移そのものに反映された研究者たちの関心の変化を分析するものである。たとえば、初期の比較宗教学の中で、宗教的な観念の重要性和その普遍性を研究する文脈では、儀礼は神話と対して捉えられ、しかも神話の二次的な反映として考察されるに過ぎなかった。しかし、ロバートソン・スミスやエミール・デュルケム等により社会に対する宗教儀礼の機能が検討されると、それは信仰よりもかえって本質的なものとして位置づけられるようになる。さらに最近になると、儀礼はそこに関わる人々の多様な諸関係が結び合う場として様々な分野から考察が加えられるようになる。この場合儀礼は、社会の統合や組織化、宗教上の目的を前提とすることなく、それ自体ひとつの独自の考察対象と目されるようになる。また、儀礼が独自のものとして考察される場合、儀礼というものは最初から決まっ

た要件をともなつて成立するような現象ではなく、むしろ文化的歴史的な脈の中で特定の行為を儀礼として特化してゆくような「儀礼化」がなされるとベルは指摘する。（——と、この様な事を原稿に書いた後、宗教学を専攻する友人から、ベルのこの著作にも色々批判があるという事を聞いた。筆者の如き素人が容易に云々できるような分野ではないと思い知った次第である。）

なお、ベルには中国の民間信仰研究を理論的な観点から考証したすぐれた書評論文（“Religion and Chinese Culture: Toward an Assessment of ‘Popular Religion’”, *History of Religions* 29, 1989）がある。

短い滞在ではあるが、その間にアメリカの大学院が日本に比べて理論面の教育に熱心であること、理論に関する知識が分野を超えて学者の間に浸透していることを実感した。しかし、理論への傾倒は時に問題も引き起こす。理論上の議論は、それがどんなに精密に見えても、その理論を提示する根拠となるべき個々の資料の読み方、資料操作の適切性の確認といった基礎作業からは離れざるを得ない。人文科学における理論的欲求は、ともすれば資料やテキストから特定の兆候や傾向のみを引き出して証拠とし、流行に資するような解釈を生み出そうとする。これは危険なことである。実際に、研究発表などの上でこのような事例に直面することも少なくない。しかし、公平に言えば「理論に強い」というのはあくまでアメリカの大学教育の長所である。問題は、むしろ日本の大学教育が地道な原典読解から別の何かに向かって遊離する時であろう。その時日本の中国学はおそらく最も本質的なものを失うのである。

日本中国学会第55回大会を終えて

松本 肇（筑波大学）

一 はじめに

会員各位の協力を得て、本年度の大会を無事終了することができた。ここに感謝の意を述べるとともに、大会ではいくつかの新しい試みを実行したので、今後の参考のために、思いついたことを記しておきたい。

二 大会準備会秘録

ここにひとつの貴重な資料がある。大阪市立大学文学部中国語中国文学研究室編「日本中国学会大会準備要綱」。大会準備の詳細な記録で、一般会員にも是非知ってもらいたいと思い、その一部を以下に引用する。

1) 出席葉書の締め切り

「例年通りの時期に締め切りを設定しましたが、実際には締め切りに間に合わないものが非常に多く、大会が終わった後に届くものもあります。」

2) 立て看板

「大会のメイン看板のほか、案内板も多く設置したつもりでしたが、大会要項に印刷したキャンパス案内図もあまり御覧いただけなかったようで、道順を訪ねられることが多くありました。結局は案内員を増員して対応しましたが、とにかく、初めて大学に足を運ばれた方にとって案内板は多すぎるということはないようです。」

3) 記念写真

「他の申し込みもそうですが、葉書で申し込まれた方のなかで大会自体を欠席される方、受付で写真のみをキャンセルされる方がいらっしゃる反面、葉書では申し込んでいなかった方が受付で申し込まれたりする場合があるほか、当日

受付でもかなりの方が申し込まれます。また、なかには全く申し込みをせずに、写真に収まった後で受付へお金を持ってこられる方もいらっしゃいます。」

こういう文章を読むと、大会準備の苦勞がよく分かる。「締め切りを守らない」「書いてあるものを読まない」「自分勝手」といった負の教官像を克服するだけで、大会運営がスムーズにいくことを、会員各位は肝に銘じるべきである。学会はつらい。

三 大会開催入門

ここでは、大会開催の手順と、その注意点について述べる。開催校の方針により、異なる方法もあるかと思われるが、本年度の体験に基づいて記す。

1、発表募集

発表募集に当たって、以下の指示を与えると、たいへん便利である。①氏名にはフリガナをつける。②電子メールアドレスを記す。③発表要旨の原稿は縦書きで、A4用紙、40字×40行に設定する。④簡体字は用いない。また、受付を五十音順にすれば、地区の記載は不要となる。

2、振り込み用の口座開設

受付での現金のやりとりを省くために、本年度は、振り込み用紙を同封し、事前に必要な金額を振り込んでもらう方式を採用した。振り替え受領証をもって領収書に代えることにしたので、領収書の発行も不要である。通信欄を利用してアンケートを取った。以上のために、大会準備会の口座を開設する。

3、大会準備金

大会準備金（120万円）は、大会委員会委員長

(本年度は合山究先生)に連絡して、入金を依頼する。

4、封筒の購入

大会要項を入れる封筒は、糊かシールのついたものを購入する。また、封筒左肩に円を作り、下半分に「料金別納郵便」と印刷する。上半分に郵便局名を印刷してもよいが、空欄にしておくところの郵便局からも発送できる。

5、宛名ラベル

大会要項発送の時期をあらかじめ学会事務局(本年度は、菊野紀子さん)に伝えて、宛名ラベルの送付を依頼する。

6、大会要項発送

一通の重さが、50グラムまでならば、90円で郵送できる。50グラムを越えると、定形外となるので、全体の重さが50グラムに収まるように、印刷物の紙質や頁数を工夫する必要がある。

7、口座の閉鎖

振り込みの締め切り後に、時期を見て開設していた口座を閉じる。これは、受付でのトラブルを避けるためである。

8、発表プログラム

本年度は、発表プログラムを会場の外に貼り出し、会場内の進行のようすが外部からも分かるように、終了した発表題目を赤線で消すようにした。

9、総会次第

総会次第は、大会前日の理事会・評議会で決定し、会議終了後に、必要な部数を印刷した。

10、受付

本年度は、五十音順に受け付け、ほかに「当日・非会員・海外」のコーナーを設けた。当日参加は、大会参加費だけを徴収するので、あらかじめ2000円の領収書を用意した。

11、名札

本年度は、懇親会参加者の名札に赤いシールを貼って、懇親会参加券の代わりとした。弁当引

換券を青いシールにすれば、もっと便利だったと思う。シールをうまく活用し、受付に名札を並べて、それを各自が取っていく方法も考えられる。

12、大会欠席者

大会前日までに参加取り消しの連絡のあった会員には、振り込んだ金額を返却する。それ以外の欠席者には、いっさい返却しない。

ほかに細かいことを挙げれば、きりがない。また、一般の会員には、関心がないことかも知れない。だが、上に述べたことは、大会開催校にとって、必ず役に立つはずである。ほぼこれだけのことを心得ていれば、学会は誰にも開ける。

四 今後の課題

学会は、研究発表が命である。本年度は、多数の応募があり、当初の予定よりひとつ部会を増やした。ありがたいことだと思っている。発表者のバランスをどのように整えるかは、むずかしい問題である。また、発表資料の部数には頭を悩ませる。過不足なくゆきわたる、いい方法がないものだろうか。今回の大会では、簡略化を心がけた。参加者名簿なども、きわめてシンプルなものにした。今後も、いろいろなアイデアを出して、少ない労力で済む方法を考えるべきである。

五 おわりに——一枚の葉書

昭和61年、筑波大学で第38回大会が開催された時のことである。昼食の弁当に、土浦の老舗小松屋のうなぎ弁当を選んだ。大会終了後、ある会員の方から、うなぎ弁当を食べることができたのがいい思い出になった、という葉書を頂戴した。この葉書を、私はいつまでも捨てることができなかった。一枚の葉書で、大会開催の苦労がいっぺんに消し飛んだことをいまでもよく覚えている。学会を通じて、人の心が見える。だから、学会は楽しい。

二年間の幹事経験から

木津 祐子 (京都大学)

私は、本学会には院生時代から入会していたのですが、熱心な会員とは到底言い難く、近くで開催される大会で、しかも同学が発表をすれば応援に行くという程度の一会員でした。助手をしていた頃、学界展望の担当が回って来てその作業の一部をお手伝いしたことが、学会に関わったとかなうて言うことのできる程度のものでした。学会は我々中国を研究対象とするものにとっては近くにあるものながら、その会務機能の維持はどこか遠くでしかるべき人々が担われるもの、その程度の自覚しか持ち合わせていなかったことを白状せねばならないでしょう。

ところがそのような事態も、三年前東大で開催された大会にたまたま出かけたことから一変することになりました。新会則のもとでの幹事をお引き受けすることになったのです。それなら総会なるものがどういふものか一度見ておこうと入った会場で、福井文雅理事長(当時)が幹事のご苦労をしみじみと労っておられるのを聞き、これはどうも大変そうだ、と漠然と感じたのを憶えています。

さて、幹事とはいったい何をしているのか、三人で分担していた職掌をまとめて簡単に書いてみることにします。

日本中国学会は、現在2100名程の会員を抱える、人文系としてはそこそこ規模の大きな学会です。今年の四月までは専従の事務担当者はおかず、一般会員の方々と全くかわらぬ大学の教員が、日常の校務の合間を縫ってさまざまなサービスに従事する形で運営されていました。幹事はその中で、あらゆるこまごまとした事務を担当します。ルーティン業務を手持ちのメモから書き出してみます。

(1) 名簿・会費管理

名簿管理(会員資格確認・発送宛名シール作成・名簿

冊子原稿作成)・入退会手続・会費請求(名簿確認・振込用紙各人印刷)・会費納入確認(振込用紙チェック・データベース入力)・保有諸口座管理・振込(各種活動費・業者及び関連団体等への振込)・年度末収支決算作成(本部・各委員会決算取りまとめ)・次年度予算原案作成

(2) 郵便物・学会報管理

学会報管理(一括発送・追加発送・バックナンバー発送)・郵便物管理(斯文会館宛郵便物振り分け)・印刷物手配

(3) 総務

役員会準備(資料作成・議事録作成・郵送作業)・各種委員会との連絡・大会関連(開催校との諸連絡)・学会報彙報および会員便り諸原稿作成・日本学術会議等各種書類作成・証明書発行

名簿とお金の管理、これが大変気の使う仕事であることは言うまでもないのですが、これだけの会員規模で、住所不明者や住所変更者の数も日々相当の量に上りますから、そのつど会員データの更新をしないと、いざ郵便物送付という時に大慌てをすることになります。しかしその更新が、毎日の授業や会議、学生指導などの合間を縫ってでは、つつい遅れがちになる。入力のためにアルバイトをお願いするにしても、まかせっきりにするわけにはいかず、作業中(たいてい自分の研究室が作業場)は、やはりそのために時間を取っておかなければなりません。

また、お金の出納も、最近は郵便局も管理が厳しくなり、高額の出金は理事長の身分証明書や個人印が必要で、しかも出入金の種類によっては、口座開設郵便局まで出かけないと話にならないこともあります。出勤途中に気軽に最寄りの金融機関で出金と振込みを済ませて、という具合には行かず、国内外の出張や日々

の忙しさに走り回っている内に納付期限が目前であることに気付くと、とにかく自分の仕事は後回しにして、金融機関への往復や書類作成に駆けずり回ることになります。

それでもこれらの仕事の多くは時期がある程度決まっているので、段取りさえきちんとしていればよいのですが、それ以外にも、随時不定期に処理すべきものがあります。例えば、会費を滞納すると学会報の送付がストップされるのですが、数年分を一括してお払いになると、そのたびにバックナンバーも含めて学会報を発送することになります。送付が遅れると、会費を払ったのに学会報の送付が無い、というクレームをいただくので、なるべく迅速に処理せねばならないのですが、校務の合間ですとなかなか思うように行きません。

会費の払い込みでも、会員全員が郵便振り替えて納付していただければよいのですが、従来は個人名ではなく勤務先の所属する上位団体名の公費として払い込まれるケースがときどきあって、理事長個人の印鑑を押した請求書と見積り書を送って欲しい、との依頼もあわせて来る。ようやく入金に漕ぎ着けても振込み人が会員名でない上にふだん使わない銀行振込みであるため、次年度会費未納者リストに当該会員を入れてしまいクレームを受ける。こうしたことが少なくないのです。学会費を公費で払うのは会員の自由なのですが、そのための書類作成・郵送・入金確認などの手間がすべて学会の負担になってしまうのです。お願いを重ね、会費は一律郵便振込みに統一しつつありますが、このようなことは、よほど「能幹」な人間であるか、日ごろから学会事務に専念するのでない限り、なかなか多方面にご不満のないよう遂行することはできません。

とはいえ、二年間で改善されたこともいくつかあります。これまでの名簿と会費管理は、会員数が少ない時代からの手作業を反映しており、それは会員基礎データファイルと会費管理ファイル、さらに郵便物発送用ファイル等がバラバラになったデータベースとなっていました。手作業と自動化が入り交じったそのシステムの全容を理解するまでに、思い出すのもつらい徒労や失敗が数々ありました。今後も増えつづける会員と、起こり得る様々な入金形態や名簿申告に、誰が・

いつ・どこで実務を担当しても対応できるようにするには、もう少し使いやすくきちんとしたデータベースを構築せねばならない、かといってシステムを外注する予算は無い。ということで何とか二年間の時間をかけて、複数の名簿と帳簿を同時に処理できるようなデータベースをいわば手作りで構築し直しました。残念ながら常時場所を確保できるような事務所を持たないので（斯文会館はあくまで連絡先及び学会報などの保管場所としてお願いしているだけで、学会の専任が常駐しているわけではないのです）、データベースのサーバーは幹事の研究室でメンテナンスせざるを得ないのですが。

そのデータベースをもとに名簿を作成する体制に昨年ようやくなりました。なんとこれまでは、会員管理原簿とは別にいちいち手作業による修正の積み重ねで会員名簿は作成されていたのです。老舗鰻屋のタレみたいなのです。そのため、住所変更を届けて郵便物は来るのに会員名簿は間違っている、又その逆のクレームが後を絶ちませんでした。昨年度は従来のデータとの照合が不完全で校正ミスも多く、不備の日立つ名簿となってしまいましたが、今年度は出版委員会のご苦勞によりかなり整備されているようすし、徐々に改善されていくことと思います。

それ以外にも、日本学術会議提出用の書類、また他の学会などとの各種交際文書作成などの作業も、一年を通じて舞い込みますから、これまで孜孜として幹事業務に従事して来られた歴代幹事の方々の貢献に、本当に改めて頭が下がるとともに、大学を巡る諸情勢や、会員増加に伴い求められる学会のあり方が、加速度的に変化していることをもつくづく感じます。

自分がいかに不熱心な会員であったかということを目頭でも述べたのですが、学会に一般会員が期待すること、また昨今の大学や研究所、また学術会議そのものの改編の流れの中で、研究者と所属する学会との関係も変化を余儀なくされているようです。学会の活動内容がしばしば内外から問われ、会費に見合うサービスを強く期待する会員も、自分が淡白な会員であったから言うものではありませんが、以前に比べ飛躍的に増加しているような印象をうけます。これは、一面、当

然の潮流なのだと思います。草創期から成長期、一人一人が学会を支えようと自覚していた時代から、すでに成熟した学会として、国内外に散らばる多様な会員へのサービス還元が期待される時代に入った、ということでしょうか。それは幹事時代、日々頂戴する会員の方々のお叱りや要望からも切実にうかがわれました。また、学術団体として、時には文部科学省や学術会議のプランチ的な働きが求められることは、これまで同様、場合によればいっそう増える予感もします。学会のあり方が刻々と更新されていくのは逃れようのないことなのでしょう。

そのような時代の要請の中、これまで通り理事長との師弟関係を基盤にした執行部が、ささやかな手作り事務局で、それこそ身を粉にして奮闘するというあり方では（もちろんそれが基本なのでしょうが）、現実問題としてできることに限りがあり、各方面のご不満と執行部の疲弊とが、不幸な比例係数化して高まるばかりという恐れもないわけではありません。

新会則のもとで、執行部は内閣、各委員会は省庁体制にも似て、理事長のもとに一極集中していた機能と責任を分散することにより、いっそう高い機動力と広く行き渡る会員サービスを企図したものと理解しています。13～14年度執行部は、会話も多く風通しの良い執行部で、みなが旧弊に囚われることなく、事務局体制のあり方を論じあってきたと思います。その新体制の執行部であって、従来の慣例から完全に抜け出せていなかったのが幹事のあり方で、二年間の試行錯誤の中で、理事長に集中する任務を献身的に支えた旧来型幹事ではなく、近代化した内閣に相応しい、秘書官にも相当するエンジンとしての幹事と、実務担当のスペシャリストが必要だと痛感しました。縷々述べてきました学会業務の数々は、昨年までは定期的に来てもらえるアルバイトを大学院生から雇い、専任バイトとしての全面的な協力を得て、何とかしのいでくることができましたが、それだけではやはり仕事に無理が出てしまう、何より学業に影響が出るのは避けねばならないということで、専任事務担当者を雇用することが真剣に検討されるようになりました。

幸いにも、この四月から事務専任として菊野さんにお手伝いいただけることになりました。菊野さんがこ

まごまとした日常的事務をきちんとこなして下さることによって、幹事二名は年間業務のスケジュール管理、会務事務の作業環境の整備やそのメンテナンスに目を配りつつ執行部のエンジン係に専念することができるようになりました。このような幹事体制の改革は、風通しの良い現執行部だからこそなしたと確信します。外からではなかなか気付かれないかもしれませんが、このように一歩ずつ事務体制改革が進んでいるのは、とても心強いことです。

さて、一般会員に戻って学会を眺めてみますと、これまで無関心だった所がいろいろ気になったり、よりよい学会を望んだり、役員の方々の負担が減るといいなあと願ったり、学会への関わり方や心構えが随分変化したことを実感します。また、学会の近代化は必然としても、会員の学会への期待がサービスに偏ったり、また学会への加入が、いわゆる業績作りの便宜を得るための目的に矮小化されて、学会発展へ自らも貢献するという発想が後回しになるようなことがちらほら見受けられると、一抹のやり切れなさを覚えたりもします。不真面目会員であった私がこうなのですから、学会運営に関心を持たれる方がより増えるなら、きっと学会の活性化につながるに違いないと思います。多くの方が学会運営に関わり、より広い意見が反映される、開かれた学会になるよう、切に祈る思いです。

二年間の幹事経験をもとに、中国学会の日頃の事務の内側について何か書いてみるようにというのが、今回の出版委員会委員長からのご下命でした。私自身は任に堪えぬと一度はお断りをしたのですが、同時に任命された三人の幹事の中から、唯一今年の四月に役目を退かせていただいた者として、これまで何をしてきたか、その一つ二つを書かせていただくのも責務の一つかと思ひ直し、重い筆を執った次第です。

私の不手際からご迷惑をおかけした方々、失策を暖かくカバーして下さった執行部を初めとする役員の皆様、この場をおかりして心よりお詫びとお礼を申し上げます。

各種委員会報告 [大会委員会]

合山 究

日本中国学会の本年度の大会（第55回）は、10月4日（土）5日（日）の両日、筑波大学で行われました。筑波大学では昭和61年（1986）に開かれて以来、17年ぶりの大会でしたが、前回はまだ小さかったブラタナスの樹々も亭々と聳えるほどに生長していて、どこまでが大学の敷地か分からないほどの広大なキャンパスには今更のように圧倒されました。理事会・評議会の行われた3日（金）も含めて、大会中は幸い連日、秋晴れの好天気で、参加者も多く、三部会に分かれて熱心な発表と活発な討論が行われました。最後のシンポジウムも止むことなく質疑応答が続き、大いに盛り上がりました。大会開催に当たって用意周到に準備され、当日は早朝から夜間まで身を粉にしてご尽力いただいた筑波大学の関係者の方々に篤く御礼申し上げます。お陰をもちまして、万事滞りなく、本年の大会も成功裏に終了することができました。

さて、明年度（平成16年度）の第56回大会は、下記の大学で行われることが、3日の評議会において正式に決定いたしました。

来年度開催校 二松学舎大学（佐藤保代表）
開催予定日 2004年10月9日（土）10日（日）

二松学舎大学での前回の開催は、昭和49年（1974）でしたから、実に30年ぶりということになります。来秋もまた奮ってご参加ください。

なお、二松学舎大学の次の開催校は、大会委員会において北海道大学をお願いすることとし、5日に開かれた理事会で承認されました。最終決定は、明年10月に二松学舎大学で開かれる評議会においてなされますが、一応お含み置き下さいますようお願い致します。

[論文審査委員会]

寛 文生

10月4日、筑波大学で2003年度第1回論文審査委員会を開き、以下のことを決定した。

（1）日本中国学会賞の選定

「日本中国学会報」第55集を対象とする学会賞の選定に当っては、12月に全評議員宛に推薦アンケートを送付し、1月20日に回答を締め切り、3月28日の委員会で候補者を内定して、理事会に報告する。なお、選定内規の「原則として40歳まで」は、第55集刊行時点における満年齢とする。

（2）「日本中国学会報」第56集掲載論文の審査

応募論文の締切は、2004年1月20日とし、2月1日に、査読委員および閲読委員を決め、3月28日に掲載論文を決定する。

また依頼論文執筆者は、5月18日の理事会で、次の4氏に依頼することが決定している。

哲学・思想部門 大島 晃（評議員）
川原秀城（一般会員）
文学・語学部門 安藤信広（評議員）
萩野脩二（一般会員）

なお10月5日の理事会で、学会報の外国語論文要旨は、これまで英語か中国語であったが、今後は英語に統一することが決定された。これに伴い、執筆者は完成原稿提出時に、400字詰原稿用紙3枚（1200字）程度の日本語要旨を同封し、それを学会が委託した専門家に英訳してもらうこととなった。

「日本中国学会報」論文執筆要領は、本号の最終頁に掲載されている。第56集の応募締切は2004年1月20日、奮ってご投稿下さい。

[出版委員会]

富永 一登

4月から委員会を2回(7月26日、10月4日)開催、また緊急を要する事項については、随時メールによる審議を行った。主な審議内容は次の通りである。

1. 2005年の『学会報』(第57集)編集担当校、学界展望担当校について

過去の担当状況に照らして検討し、それぞれの担当校の内諾を得、来年の理事会に諮ることとした。

2. 『学会報』(第55集)の印刷会社選定について

3社から見積をとり、モリモト印刷に依頼することとし、持ち回り理事会で了解を得た。来年度の第56集もモリモト印刷に頼むことにし、理事会にはかり了解された。

3. 『学会報』(第55集)の学界展望のコメントについて
哲学部門(河田悌一委員担当)、語学部門(花登正宏委員担当)、文学部門(赤井益久委員担当)のコメントに、各委員が目を通し、意見交換を行った。

4. 『学会便り』の内容について

内容は、昨年一新した方向を継続することとし、12月号と来年4月号について、各委員の意見をもとに、原稿の依頼をすることとした。

なお、12月号には、学会展望の著書論文の会員自己申告用紙を同封しますので、ご協力よろしく願います。

5. 学界展望の抜刷について

3部門それぞれ50部の抜刷を作成することとし、後日、理事会の了解を得た。

6. 『学会報』の論文要旨について

英文・中文(繁体字・簡体字)の混在は問題があるとの意見について審議し、理事会にはかることとした。

理事会で、来年の第56集からは英文に統一することが決められました。本『学会便り』最終頁に掲載している「論文執筆要領」の「論文要旨」の項目をご参照願います。

[研究推進・国際交流委員会]

中嶋 隆藏

第一回委員会

5月18日(日) 11:00~12:00

於青山学院大学

出席者: 中嶋隆藏、坂元ひろ子、二階堂善弘、藤井省三、菱谷邦夫、金文京

- ・委員長並びに各委員
- ・議事運営の段取り
- ・懸案の問題(『日本中国学会報』所載論文の電子化問題。国際電気標準会議(ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG)出席者に対する日本中国学会からの旅費援助について。)

以上、三つについて相互承認し、見解を交換した。上記の件につき、同日午後開催の理事会で報告し、懸案問題処理についての提示を受けた。

第二回委員会

10月4日(土) 12:45~13:35 於筑波大学

出席者: 中嶋隆藏、二階堂善弘、藤井省三、菱谷邦夫、金文京

- ・第一回委員会以降、理事会での意見、理事長の意向などを勘案しつつ、数次に渉り、メールで委員全員から意見を集め、懸案問題処理の大綱についての検討を行ったのを踏まえて、理事会に報告し、諒承を得た。

大綱の概要

- ・より具体的な作業班において電子化問題については考えてもらうことにする。
- ・今年度は、日本中国学会の代表として一名に旅費を支援する。

[将来計画特別委員会]

池田 知久

2003年度第1回委員会議事要録(案)

日 時：2003年7月12日(土) 13:00～17:00

場 所：学士会館分館

出席者：9名

委員長 池田 知久 (大東文化大学)

委員 佐藤錬太郎 (北海道大学)

委員 渡部 英喜 (盛岡大学)

委員 向嶋 成美 (筑波大学)

委員 久保田知敏 (聖心女子大学)

委員 山口 久和 (大阪市立大学)

委員 野間 文史 (広島大学)

副理事長 大上 正美 (青山学院大学)

幹事 宮本 徹 (放送大学)

欠席者：1名

副委員長 堀池 信夫 (筑波大学)

議題

審議事項

以下の各点について委員に諮り了承された。

(1) 議事要録の承認

2002年度第3回将来計画特別委員会議事要録案が提示され、承認された。

(2) 会則改正案の検討

2002年度第3回委員会において取りまとめられた中間報告案(以下、「第一次案」)を基に更なる検討を加えた。第一次案からの変更点は以下の通りである。

1. 各条文の冒頭に見出しを付す。
2. 現行会則中の「及び」を一律に「および」に改める(第2条、第3条第2項、第7

条、第8条第2項、第11条第3項、同第4項、同第6項、第12条第8項)。

3. 第7条の「当てる」を「充てる」に改める。
4. 第8条第2項「賛助会員」の「(原則的には法人)」を削除する。
5. 第9条第1項の「集会」を「大会等」に改める。
6. 第10条第5項「評議員」の「若干名」を、選挙規約の改正に従い「60名」に改める。
7. 第10条第8項「各種委員」を「各種委員会委員」に改める(第11条第6項・第12条第8項もこれに倣う)。
8. 選挙規約1の(1)を以下のように改める(下線部が変更点)。

「通常会員により、無記名で10名を連記して投票し、上位60名を当選者とする。ただし北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の各地区の会員4名を含むこととし、上位60名の中に当該地区選出者が4名に満たない時には、当該地区会員の最高得票者から順に評議員に加える。また女性の評議員会参加を促進するため、今後当分の間、女性会員最高得票者から第6位得票者まで6名を評議員に加える。」

なお詳細は下文「(3) 選挙規約改正案の検討」を参照。

9. 評議員会・理事会・監事会規約及び委員会規約中の「各委員会」を一律に「各種委員会」に改める。

10. 委員会規約3の(2) cを「登載決定論文に対する修正意見の提示と修正の確認」に改める。
11. 委員会規約3の(2)についてのただし書きを、「ただし、eは評議員による推薦をもとに行い、さらに理事会にはかって決定する。その結果は理事長が評議員会に報告するものとする。」に改める。
12. 委員会規約3の(3) gに「外国文要旨の作成」を加え、以下の番号を繰り下げる。
13. 山口委員の提案に基づき、委員会規約3の(6)及び(7)として、データベース管理委員会及びホームページ管理委員会の任務をそれぞれ規定する。詳細は別紙「日本中国学会会則改正案(第二次案)」を参照。
14. 移行措置について、「平成17年4月1日より新会則を完全実施するまでは、現会則による事務局が事務を担当する。」とする。

(3) 選挙規約改正案の検討

評議員・理事の選出について、現行規約では必ずしも地方の実情を十分反映し得ないという点において各委員の認識は一致した。具体的な選出方法については、佐藤委員の提出した試案を基に討議を重ねた結果、①各地区の評議員数を現行の最低2名から4名に引き上げること、②それに伴い評議員の総数を50名から60名に引き上げること、の二点で衆議一致した。ただし②については次回の委員会でも更に検討を加えることとした。

また引き続き女性の評議員会参加を促進するとの観点から、敢えて時期を区切らず、今後当分の間、女性会員中第6位得票者までを評議員に加えることとした(現行は第5位まで)。

以上



平成15年度学会員動向

●本年度『学会便り』第一号発行以来、12月1日現在の物故会員は以下の通りです。(五十音順 敬称略)

入谷 仙介 尾崎 實 佐川 修
 帥 民心 山崎 純一 湯浅 幸孫

●退会会員

○退会申し出会員 計18名

井澤 明肖 遠藤 光正 加龍 秀明
 小池 千尋 高 峰 越水 榮三
 篠崎 拱子 宿 玉堂 立間 祥介
 千葉 仁 陶山 信男 成瀬 千枝子
 福田 稔 堀野 このみ 松本 昭彦
 宮田 和子 森川 加代子 築瀬 桂子

○四年会費未納による退会会員 計70名

●住所不明会員

関東地区	石田 博	伊藤 美晴	林 泰弘
	岩見 輝彦	何 群雄	金川 朋絵
	川出 深雪	工藤 明美	関野 淑子
	張 毅	田 芳	長瀬 栄治
	野崎 元華	馬場 久佳	馮 日珍
	松下 愛理	李 征	若松 信爾
中部地区	王 賀英	周 先民	長村 美慧
近畿地区	井後 尚久	川島さおり	東口 佳純
中国・四国地区			
	伊藤 雅哉	岡本 慎弥	笠井 幸博
	菊森 大治	笹岡恵美子	陳 梅
九州地区	高 継芬	矢嶋 徹輔	
国外	劉 雨珍		

※上記会員の連絡先をご存知の方は、お手数ですが事務局までご一報ください。

平成15年度新入会員一覧

10月3日に開催された評議員会で入会を承認されたのは以下の通りです。

○一般会員

相原 健右 関東 二松学舎大学(院)
 〒214-0036 川崎市多摩区南生田7-15-7

赤松美和子 関東 お茶の水女子大学(院)
 〒175-0093 板橋区赤塚新町3-3-11-203

秋谷 幸治 関東 大東文化大学(院)
 〒345-0802 埼玉県南埼玉郡宮代町字中島458-4

浅野 春二 関東 國學院大学(院)
 〒216-0007 川崎市宮前区小台1-4-7 カサベルテ宮前平408

有木 大輔 九州 九州大学(院)
 〒838-0106 小郡市三沢4225-142

稲垣 裕史 近畿 京都大学(院)
 〒606-8113 京都市左京区一乗寺東杉ノ宮町1 澤野アパート北室

今村 隼人 関東 二松学舎大学(院)
 〒136-0071 江東区亀戸1-32-3 アーバンタニ603

浦部 依子 近畿 関西大学(非)
 〒529-1313 滋賀県愛知郡愛知川町市903

遠藤 寛朗 関東 二松学舎大学(院)
 〒277-0922 千葉県東葛飾郡沼南町大島田625-2

遠藤 星希 関東 東京大学(院)
 〒124-0025 葛飾区西新小岩5-17-16 田中マンション201

王 蘭 近畿 大阪大学(院)
 〒590-0143 堺市新松尾台3丁1-8-1002

大賀 晶子 近畿 京都府立大学(院)
 〒564-0022 吹田市末広町1-12

大野 公賀 関東 東京大学(院)
 〒167-0022 杉並区下井草5-9-6-202

大森 信徳 関東 早稲田大学(院)
 〒187-0004 小平市天神町1-72-2

荻野 友範 関東 早稲田大学(院)
 〒221-0861 横浜市神奈川区片倉町359-8

小野美由紀 近畿 京都府立大学(院)
 〒602-0931 京都市上京区今出川通室町西入堀出三町309 佐々木ビル305

小野 夕子 近畿 京都大学(院)
 〒606-8227 京都市左京区田中里ノ前町80 松里アパート35

小幡みちる 関東 早稲田大学(院)
 〒272-0004 市川市原木1-16-19 メゾン原木205

樫 岳樹 北海道 北海道教育大学
〒004-0074 札幌市厚別区厚別北1条4丁目1-3 107号

加部勇一郎 北海道 北海道大学(院)
〒001-0023 札幌市北区北23条西8丁目3-24-5

魏 秀美 中部 名古屋大学(院)
〒465-0086 名古屋市名東区代方町二丁目19-405

木村 知実 近畿 関西大学(院)
〒564-0073 吹田市山手町4-33-18-314

京極 健史 関東 二松学舎大学(院)
〒168-0081 杉並区宮前2-18-14

虞 萍 中部 名古屋大学(院)
〒460-0007 名古屋市中区新栄2-12-20 グリーンアメニティ新栄5D

工藤 卓司 中国・四国 広島大学(院)
〒739-1733 広島市安佐北区田南6丁目11-16 ドミール大島B101

呉 宛怡 近畿 京都大学(院)
〒605-0051 京都市東山区粟田口鍛冶町6 中村様方2号

後藤 裕也 近畿 関西大学(院)
〒590-0138 堺市鶴谷台1丁目4番17棟301号

坂野 和弘 中国・四国 県立山口高等学校
〒754-1211 山口県吉敷郡阿知須町2855-20

鄭 宰相 近畿 京都大学(院)
〒606-8247 京都市左京区田中東春菜町23-1 祥風荘南館25号室

白井 澄世 関東 東京大学(院)
〒277-0072 柏市つくしが丘3-18-7

沈 順福 国外 山東大学
中国山東省済南市山東大学哲学系

鈴木 達明 近畿 京都大学(院)
〒606-8214 京都市左京区田中南大久保町61 アメニティハウスII201号

関 清孝 関東 大東文化大学(院)
〒175-0082 板橋区高島平1-15-7 レストハウス西台107号

関 浩志 関東 筑波大学(院)
〒350-0827 川越市寺山27-2

高田 宗平 関東
〒274-0072 船橋市三山7-4-8

高戸 聡 東北 東北大学(院)
〒980-0812 仙台市青葉区片平1-1-3 ホワイトレジデンス1006

谷口 高志 近畿 大阪大学(院)
〒567-0031 茨木市春日4-9-40

千葉 由紀 東北 東北大学(院)
〒987-0005 宮城県遠田郡小牛田町北浦字大口66-9

千葉のぶ江 関東 聖徳大学(院)
〒271-0064 松戸市上本郷858-2 北松戸駅前ビル303

趙 立男 中部 名古屋大学(院)
〒466-0853 名古屋市昭和区川原通8-35 晴和荘105号

鄭 塔謨 近畿 京都大学(院)
〒606-8157 京都市左京区一乗寺才形町61-6

津守 陽 近畿 京都大学(院)
〒532-0002 大阪市淀川区東三国3丁目9番11-612 ユニライ7北大阪1号棟

中谷 征充 近畿 高野山大学(院)
〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町626番地 霧谷輝司様方

永淵 正是 近畿 京都大学(院)
〒606-8203 京都市左京区田中関田町23-4 エルマーナ出町柳407号

中村 綾 近畿 京都府立大学(院)
〒603-8152 京都市北区鞍馬口通島丸西入小町216-5 アルカディア301号室

二宮美那子 近畿 京都大学(院)
〒606-8216 京都市左京区田中西南西浦町89-1 パラシオン堤301

馬場 昭佳 関東 東京大学(院)
〒133-0057 江戸川区西小岩1-6-12

濱岡久美子 近畿 京都府立大学(院)
〒563-0103 大阪府豊能郡豊能町東ときわ台7-9-2

濱野靖一郎 関東 二松学舎大学(院)
〒112-0002 文京区小石川4-20-5-704

早川 智美 近畿 大谷大学(院)
〒536-0016 大阪市城東区蒲生2-7-38

福原みつ希 中部 名古屋大学(院)
〒464-0071 名古屋市中種区若水2-3-11 サンマンションD-203

藤田 益子 中部 新潟大学
〒950-2101 新潟市五十嵐一の町6776-32 ミツレ・エスタージェ202号

松本 奈々 関東 聖徳大学(院)
〒277-0942 千葉県東葛飾郡沼南町高南台1-6-30

宮下 聖俊 関東 大東文化大学(院)
〒175-0094 板橋区成増2-37-2-510

宮下 和大 関東 早稲田大学(院)
〒176-0022 練馬区向山4-33-18

好川 聡 近畿 京都大学(院)
〒606-8211 京都市左京区田中西大久保町14 レジデンスシマダII407

藍 弘岳 関東 東京大学(院)
〒114-0024 北区西ヶ原2-34-14-601

李 為民 中部 名古屋大学(院)
〒464-0832 名古屋市中種区山添町2-14-209

李 順剛 国外 北京広播学院文学院

○賛助会員

株式会社 中華書店 (代表者: 劉 羅忠)
〒101-0051 千代田区神田神保町2-20-6

株式会社 東方書店 (代表者: 山田 真史)
〒101-0051 千代田区神田神保町1-3

株式会社 白帝社 (代表者: 佐藤 康夫)
〒171-0014 豊島区池袋2-65-1

平成15年度 日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覽

(単位：千円)

特定領域研究(新規)

- 東アジア出版文化の研究—学問領域として書誌・出版の研究を確立するため— 53,600
磯部 彰(東北大学)
- 「東アジア出版文化の研究」調整班(E)出版政策研究 400
新宮 学(山形大学)
- 「東アジア出版文化の研究」調整班(D)出版文化論研究 400
大塚秀高(埼玉大学)
- 東アジアの印刷史からみた日本印刷文化の起源 1,700
石塚晴通(北海道大学)
- 中国近世における小学書出版に関する研究 1,800
花登正宏(東北大学)
- 明萬曆嘉興藏の出版とその影響 1,700
中嶋隆藏(東北大学)
- 中国南部の族譜・版本と手抄本の社会的機能の比較を中心とした研究 1,400
瀬川昌久(東北大学)
- 戦国から泰・漢への時代転換と写本の変化 1,500
浅野裕一(東北大学)
- 宋代官僚体制確立における出版の役割 1,500
熊本 崇(東北大学)
- 中国教派系宝巻の出版システム研究 4,500
磯部 彰(東北大学)
- 中国明清両王朝による「国史」の編纂と出版のプライオリティ 1,700
新宮 学(山形大学)
- 東アジアにおける医薬書の流通と相互影響 1,700
貞柳 誠(茨城大学)
- 江戸時代における漢籍の流転—佐伯文庫を例に— 2,600
大塚秀高(埼玉大学)
- 朝鮮に伝来した漢訳西学書・天主教書の研究 1,900
鈴木信昭(富山大学)
- 「東アジア出版文化の研究」調整班(F)出版交流研究 400
鈴木信昭(富山大学)
- 坊刻書を中心とする明刊本書誌の研究 1,700
井上 進(名古屋大学)

- 明清時代における政書・官箴書の出版の研究 1,700
谷井俊仁(三重大学)
- 中央アジア古文獻における写本の発達と印刷本導入に関する研究 1,700
庄垣内正弘(京都大学)
- 新・旧キリスト教ミッションの東アジアにおける出版活動 1,700
高田時雄(京都大学)
- 東アジアにおける仏教典籍の刊版とその流通 1,600
梶浦 晋(京都大学)
- 満州本ユニオンカタログ作成のための基礎的研究 1,600
岸田文隆(大阪外国語大学)
- モンゴルにおける出版文化の誕生と変遷 1,700
樋口康一(愛媛大学)
- 佛教書および通書の東アジアの展開 1,700
三浦国雄(大阪市立大学)
- 写本から版本へ—チベット文獻における書写様式の推移 1,500
武内紹人(神戸市外国語大学)
- 東アジア出版史をめぐるデータ整理研究 1,600
石田義光(東北学院大学)
- 和漢の辞書・類書の書誌的研究 2,800
岡場 武(慶應義塾大学)
- 我邦舶載宋版一切経の「刊・印・修」に関する書誌学的基礎研究 1,700
牧野和夫(実践女子大学)
- 宋以後の坊刻本を中心とする刊本の編集・出版等に関する研究 1,700
小川陽一(大東文化大学)
- 日本における「四書集注」の周辺 1,700
吉田公平(東洋大学)
- 中国における印譜の成立とその展開 1,700
高山節也(二松学舎大学)
- 日本支配下中国・満州州における出版文化の諸相 1,700
岡村敬三(京都学術大学)
- 中国近世の知識人社会と出版文化、とくに科挙関連資料と類書を中心に 1,700
森田憲司(奈良大学)
- 中国における才子佳人小説の出版と朝鮮・越南・日本への影響 1,700
磯部祐子(高岡短期大学)

- 漢字の古写本にみる書式の定形化と初期の印刷物の図様および版式に関する調査研究 1,600
赤尾栄慶(京都国立博物館)
- 「東アジア出版文化の研究」調整班(C)出版環境研究 400
若尾政希(一橋大学)
- 「東アジア出版文化の研究」調整班(A)出版機構研究 400
金 文京(京都大学)
- 「東アジア出版文化の研究」調整班(G)出版情報・書目研究 400
高山節也(二松学舎大学)
- 17世紀中国における「四書大全」検証運動の思想史的社会的意義 1,500
三浦秀一(東北大学)
- 「東アジア出版文化の研究」調整班(B)出版物の研究 400
三浦秀一(東北大学)
- 「和漢軍書」出版の思想史的研究—日本近世の出版環境と社会変容— 1,400
若尾政希(一橋大学)
- 日本現在朝鮮古刊本の調査と総合目録の作成 1,500
藤本幸夫(富山大学)
- 中国近世の商業出版と文人 1,500
金 文京(京都大学)
- キリシタン版の書誌的研究 1,400
岸本忠実(大阪外国語大学)
- 中華書局と中華人民共和国の古籍整理事業—「二十五史」の校点出版の背景 1,400
陳 仲奇(鳥根県立大学)
- 「満州国」時代を中心とする「満蒙」関係刊行物の研究 1,300
原山 煌(桃山学院大学)
- 中国明清時代における官箴書・公牘の書目作成 1,400
夫馬 進(京都大学)
- 「玉篇」写本・版本の漢字字体規範に関する研究 1,500
池田証壽(北海道大学)
- 中国六世紀の詩文総集「文選」の写本・版本と当時の別集との関係 1,300
佐竹保子(東北大学)
- 近世日本社会における「書物」移動の文化的機能に関する研究 1,500
高橋章則(東北大学)

- 近世東アジアにおける印刷術に関する産業考古学的資料の調査研究 1,000
粟野 宏(山形大学)
- 中国古典文庫における画像及びテキストデータ処理の諸問題 1,000
二階堂善弘(茨城大学)
- 中国清朝・民国時代の北京等都市における非漢語出版文化に関する社会史的研究 1,400
中見立夫(東京外国語大学)
- 『三国志演義』および明清期の『三国志物語』作品の出版システムについての研究 1,400
中川 諭(新潟大学)
- 漢訳版経附載音釈に関する基礎的研究 1,400
山田健三(信州大学)
- 清代法律書籍(とりわけ律註積書)の出版政策 1,400
寺田浩明(京都大学)
- 明代の科挙制度と出版に関する研究 1,200
鶴成久章(福岡教育大学)
- 中華人民共和国の非公刊行物における文学資料の調査・研究 1,300
岩佐昌あき(九州大学)
- 朝鮮本に関する書誌学的データベースの構築 1,200
松原孝俊(九州大学)
- 近世地球における漢籍の収集・流通・出版についての総合的研究 1,000
高津 孝(鹿児島大学)
- 中国書画の印刷出版環境をめぐる諸問題の文化史的研究 1,000
河内利治(大東文化大学)
- 『和漢朗詠集』絵入り版本の詩題と画題 1,000
蔵中しのぶ(大東文化大学)
- 民間祭祀儀礼演劇の古記録抄本による伝承と変容の研究 1,400
有澤晶子(東洋大学)
- 紅衛兵出版物の研究 700
鱗澤彰夫(日本大学)
- 近代における古典籍の出版をめぐる日中学术交流の研究 1,400
陳 捷(日本女子大学)
- 王陽明の著作の出版に関する総合研究 1,400
永富冨地(早稲田大学)
- 20世紀前半期における旧満州の地域情報に関する出版物の類型化とその特性研究 1,300
藤田佳久(愛知大学)
- 国家事業としての口承文芸の採集とその出版—中国「三套集成」プロジェクト— 1,000
手塚恵子(京都学園大学)
- 14世紀末朝鮮の中国語学習書についての研究 1,000
田村祐之(姫路獨協大学)

- 東アジアにおける漢文受容と角筆使用の関係について 1,400
西村浩子(松山東雲女子大学)
- ネットワーク統合型データベースによる東アジア資料の共有化に関する研究 1,400
原正一郎(国文学研究資料館)
- 東アジア出版初期における中国の拓本・法帖に関する調査研究 1,500
富田 淳(東京国立博物館)

萌芽研究・新規

- 中国伝統医学思想によるパターン・モデル群の解析 900
石田秀実(九州国際大学)
- 革命現代京劇における人物形象とその身体 1,000
平林宣和(広島経済大学)
- 古筆切の総合的資料研究 1,600
小島孝之(東京大学)
- 毛沢東カルトに関する文化人類学的研究 800
韓 敏(国立民俗学博物館)

萌芽研究・継続

- 章炳麟の哲学思想と日本明治30年代思潮との比較考察 600
小林 武(京都産業大学)
- 鎌倉時代における中国禅思想の受容とその展開—臨済系を中心に— 800
何 燕生(郡山女子大学短期大学部)
- 和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究 1,100
相田 満(国文研究資料館)
- 中国文学における古典文学と児童文学の交渉 500
彭 佳紅(帝塚山学院大学)
- 彙音妙悟の分析と校訂 500
樋口 靖(東京外国語大学)

若手研究(B) 新規

- 中国における「孝」思想の成立と展開—新出土資料から見た— 800
佐野大介(大阪大学)
- 郝敬の基礎的研究 1,800
川田 建(愛知文教大学)
- 懷徳堂学派における中国天文学と西洋天文学の受容—中井履軒の場合— 800
久米裕子(神林裕子)(京都産業大学)
- 『瑜伽師地論』に見られる瑜伽行派の思想的発展について 900
高橋晃一(東京大学)
- 中国中世仏教の類書の研究—梁代の『経律異相』を中心に— 1,100
宮井里佳(埼玉工業大学)

- 中世日本における禅宗の請来に伴う宋代風水の受容に関する研究 1,300
鈴木一馨(財)東方研究会)

- 東アジアにおける悪道巡歴・救済のイメージの展開と相互影響に関する研究 1,600
鷹栗 純(愛知教育大学)

- 中国南錠朝期における仏教美術の西方様式受容に関する研究 1,000
村松哲文(早稲田大学)

- 「満州国」の中国語文学作品に見る日本人・日本語像と複数言語状況 700
橋本雄一(千葉大学)

- 民国期における上海京劇の発展に関する研究 1,200
藤野真子(富山大学)

- 「漢奸」文学雑誌研究—上海植民地時代を中心に— 1,000
梁 有紀(富山大学)

- 中国近世の言説における「国家」と「民族」 900
笠井直美(名古屋大学)

- 「満州国」時期の中国人作家とその文学活動についての基礎研究 1,300
大久保明男(東京都立短期大学)

- 中国東南方言文法の記述的研究 800
佐々木勲人(筑波大学)

- 近世初期古辞書の漢字字体に関する研究 1,000
白井 純(北海道大学)

- 漢語研究資料としての明治前期語彙集型往來の資料的性格の分析と語彙索引の作成 1,200
小原秀樹(独立行政法人国立国語研究所)

- 中央アジア出土古代ウイグル語社会経済文書の基礎的整理と歴史学的研究 1,500
松井 太(弘前大学)

- 日本植民地期における社会事業の展開と台湾仏教の近代化に関する史的研究 1,700
松金公正(宇都宮大学)

- 魏晉南北朝における遷官制度 1,400
藤井律之(京都大学)

- 西晋王朝支配構造の総合的研究—西周墓葬及び青銅器銘文の分析を中心として— 1,100
岡本真則(早稲田大学)

若手研究(B) 継続

- 中国清末知識人の思想と生活 500
川尻文彦(帝塚山学院大学)

- 清代後期紹興地方の思想文化に関する研究 100
早坂俊廣(信州大学)

- 蘇州崑劇の演劇・歌法・字音の基礎的調査及び研究 900
石井 望(長崎総合科学大学)

- 「読経道」の研究—法華経読誦の芸道化に関する総合的研究— 800
柴佳代乃(千葉大学)
- 日本、中国における「三国志演義」の読書史研究 600
上田 望(金沢大学)
- 清代知識人社会における八股文の役割について 500
浅井邦昭(金沢学院大学)
- モンゴル時代の出版文化と語制度の研究 1,100
宮 紀子(京都大学)
- 白居易文学の特質「多情性」を支えた中唐の美意識「風流」の研究 800
諸田龍美(愛媛大学)
- 鲁迅を核とした日中比較文学研究 700
秋吉 取(佐賀大学)
- 金代の字書・韻書の後世における受容に関する研究 500
大岩本幸次(大阪市立大学)
- 清代における歴史物語の変遷と受容—蕪家将故事を中心に— 1,400
千田大介(慶應義塾大学)
- 中国人日本語学習者の発話にみられる「不明瞭さ」の音声学的研究 300
石原純也(広島大学)
- 中国積石山地域の消滅の危機に瀕した言語・保安語の調査研究 600
佐藤暢治(広島大学)
- 近代日本における帝国意識の形成過程と植民地台湾との人的移動の関連をめぐめる研究 1,100
松田京子(愛知教育大学)
- 漢籍(類書)からみた日本古代における中国文化受容の研究 700
水口幹記(早稲田大学)
- 軍隊の思想と財政—唐宋変革の一側面— 800
丸橋充拓(島根大学)
- 中国古代の官僚制と文化—特に漢代の古官蔵を中心に— 700
佐藤達郎(大阪樟蔭女子大学)
- 中国西北地における回族コミュニティの生活文化と地域変容 700
高橋健太郎(早稲田大学)
- 台湾漁民社会における民俗知識と「日本」—植民統治の影響とその翻訳をめぐって— 900
西村一之(日本女子大学)
- 中国法典形成史—国家法の非国家的形成に関する通史的な考証 1,400
陶安あんど(東京外国語大学)
- 中国農村部における文化大革命と教育に関する研究—オーラルヒストリーによって— 500
山田美香(名古屋大学)

基盤研究(A) 新規

- 金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究 10,200
落合俊典(国際仏教学大学院大学)
- 前近代東アジアにおける日本関係史料の研究 9,200
保谷 徹(東京大学史料編さん所)
- 宇都宮太郎関係資料からみた東アジアと近代日本 12,500
吉良芳恵(日本女子大学)
- 中国県制の総合研究 11,700
森 時彦(京都大学)

基盤研究(A) 継続

- 中国旅順博物館所蔵新疆出土文物に関する総合的研究 5,800
上山大峻(龍谷大学)
- 和本及び和刻漢籍に於ける各種伝記資料の所在に関する調査研究 7,200
落合博志(国文学研究資料館)
- 幕末期より明治にかけての肥前・肥後における歌学・漢学及び文事に関する研究 4,900
上野洋三(九州大学)
- 日本・中国・ヨーロッパ文学における絵入本の基礎的研究及び画像データベースの構築 5,800
渡辺守邦(実践女子大学)
- 環太平洋圏の華文文学に関する基礎的研究 1,500
山田敬三(福岡大学)
- 20世紀台湾の言語・文学・演劇映画に関する総合的研究 8,900
戸倉英美(東京大学)
- アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態 8,500
梶 茂樹(東京外国語大学)
- 中央アジア古文書の言語学的・文献学的研究—ロシア所蔵未発表文献の解明— 9,700
庄垣内正弘(京都大学)
- 東大寺所蔵聖教文書の調査研究 4,700
綾村 宏
(独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)
- 禪宗寺院文書の古文書学的研究—宗教史と史料論のほごま— 2,400
保立道久(東京大学史料編さん所)
- 禁裏・宮家・公家文庫取蔵古典籍のデジタル化による目録学的研究 6,800
田島 公(東京大学史料編さん所)
- 20世紀中国社会の構造的変動と日本—新たな日中関係研究の模索— 3,500
久保田文次(日本女子大学)
- 8—17世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流 5,600
村井章介(東京大学)

- 我国伝統中国学の独自性を発信するためのシステム開発 6,700
平瀬隆郎(東京大学)
- 東アジアにおける法と習慣—死刑をめぐる諸問題 8,300
富谷 至(京都大学)

- アジア諸社会におけるエリートのネットワークと文化表象—比較研究の試み— 9,600
中里成章(東京大学)
- 古典籍・古文書解読のための自習システムの開発 7,300
山崎 誠(国文学研究資料館)
- 中国四川省石窟摩崖造像群に関する記録手法の研究及びデジタルアーカイブ構築 11,200
肥田路美(早稲田大学)
- 旧日本植民地・占領地におけるアーカイブ政策と記録伝存過程の研究 6,000
安藤正人(国文学研究資料館)
- 中国江南沿海村落の民族誌的研究 4,600
福田アジオ(神奈川大学)
- アジア諸社会におけるジェンダーの比較研究 8,700
宮坂靖子(奈良女子大学)

基盤研究(B) 新規

- 和漢古典学のオントロジモデルの構築 3,300
相田 満(国文学研究資料館)
- 江南道教の研究 3,500
麦谷邦夫(京都大学)
- 大乘仏教の起源と実態に関する総合的研究—最新の研究成果を踏まえて— 6,700
斉藤 明(東京大学)
- 中国美術の図像学的研究 7,400
曾布川寛(京都大学)
- 中世後期南都蒐蔵古典籍の復元的研究 3,400
武井和人(埼玉大学)
- 日本国外に現存する日本漢籍に関する研究 4,600
佐藤道夫(慶應義塾大学)
- 古代幼学書の基礎的研究 6,200
黒田 彰(佛教学)
- 幕末明治期における漢詩文系作文書の総合的研究 3,500
斎藤希史(東京大学)
- 四庫提要にみる南宋詩文集の流伝と文学評価に関する実証的研究 3,000
野村結子(奈良女子大学)
- 日中朝をめぐる交流と日本古代文学についての研究—渤海使と文学・「聖徳太子伝説」— 2,400
田中隆昭(早稲田大学)

- 中国南北朝後期隋唐期の石刻文字資料の
集成・データベース構築と地域社会文化の研究
6,700
気賀沢保規(明治大学)
- 東アジアにおける「学」の連鎖—中華民国期
の日中間の留学生派遣に関する比較研究
4,200
大里浩秋(神奈川大学)
- 日露戦争期の東北アジア国際関係:未公文
書史料を中心とする研究基盤の形成
2,900
原 暉之(北海道大学)
- 日中戦争期における中国の社会・文化変容
2,900
平野健一郎(早稲田大学)
- 中国古代の版築技術の日本への伝播経路
とその変遷
5,000
鬼塚克忠(佐賀大学)
- 中国・新疆ウイグル自治区の女性と生活環
境に関する総合的研究
3,700
岩崎雅美(奈良女子大学)
- 中国新疆ウイグル族におけるコンテクストの
変化にともなう楽器文化
3,800
樋口 昭(埼玉大学)
- 西藏自治区—青海省を結ぶ藏族の工芸美術と
芸能の文化、その資料と保存に関する研究
2,900
服部等作(広島市立大学)
- 標準中国語の単音節母音と声調に関する北
京・台湾間の音響学的・社会言語学的対照研究
2,200
SANDERS ROBERT, M(東北大学)
- 台湾・北部フィリピン少数民族の口頭伝承に
関する言語学的・人類学的調査研究
4,800
森口恒一(静岡大学)
- アジアにおける手話言語とろう社会に関する
社会言語学的研究
1,300
加藤三保子(豊橋技術科学大学)
- 中国女文字の保存の方法を探る
2,200
遠藤織枝(文教大学)
- 岡門江圏の居民生活史にみる自然・社会環
境の基礎的研究
8,500
上野稔弘(東北大学)
- 東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査
2,800
荒川正晴(大阪大学)
- 中国東南部における宗教の市場経済化に関
する調査研究—コンテクスト分析による—
3,600
佐々木伸一(京都外国語大学)
- 中国民族法制の総合的研究
3,700
西村幸次郎(一橋大学)
- 現代中国における社会の自律性に関する学
術調査
2,700
菱田雅晴(静岡県立大学)
- アジア家族の変容と「伝統の創造」に関
する比較研究—日本・韓国・中国・タイ
5,300
橋本泰子(関 泰子)(四国学院大学)

- お金をめぐる子どもの生活世界の日中韓越比較
研究:儒教文化圏の多様性と文化変容
3,200
山本登志哉(共愛学園前橋国際大学)
- アジア圏学生のための科学技術日本語総
合技能学習支援システム開発調査と評価研究
4,600
仁科喜久子(東京工業大学)

基礎研究(B) 継続

- 中国語チュートリアルシステムの国際共同開発
2,800
砂岡和子(早稲田大学)
- 多言語同時処理によるアジア系言語の自然
言語翻訳に関する基礎研究
3,700
高階美行(大阪外国語大学)
- 大谷探検隊将軍西蔵壁画の保存修復に関
する総合研究
4,200
青木繁夫(東京文化財研究所)
- 近代中国東北部(田満州)文化に関する総
合研究
4,000
劉 建輝(国際日本文化研究センター)
- 戦国楚系文字資料の研究
1,800
竹田健二(島根大学)
- 宋代士大夫の相互性と日常空間に関する
思想文化学的研究
2,000
佐藤慎一(東京大学)
- 「大乘起信論」と法蔵教学の実証的研究
1,500
井上克人(関西大学)
- 「易」の起源・成立及びその解釈の歴史
的展開に関する研究
3,900
伊東倫厚(北海道大学)
- 道教における女性観の研究
1,100
砂山 稔(岩手大学)
- 六朝隋唐精神史の研究
1,600
宇佐美文理(京都大学)
- 齋醮の研究
2,400
小林正美(早稲田大学)
- 仏教移入が及ぼした東アジアにおける世界
観・人間観への影響の研究
1,900
藤井教公(北海道大学)
- 北京版チベット大蔵経のデジタルイメージと
思想史研究
1,400
宮下晴輝(大谷大学)
- 中道の思想と実践—ツァンカバの中観哲学
に基づく大乘の仏道の総合的研究
1,300
白館成雲(大谷大学)
- 植民地期中国東北地域における宗教の総
合的研究
4,200
木場明志(大谷大学)
- 文化的自己主張の歴史と現在の諸様態—
ドイツ及び東アジアを中心に
2,900
三島蕪一(大阪大学)

- 伊藤仁斎・東涯の思想に関する総合研究
1,200
丸谷見一(中部大学)
- アジアの藝術思想の解明—比較美学的観
点からの研究—
1,600
金田 晋(東亜大学)
- 清元節の基礎的研究
1,100
安田文吉(南山大学)
- 岩瀬文庫所蔵古典籍の完全調査と書誌デ
ータベースの完成
1,800
塩村 耕(名古屋大学)
- 16~18世紀の日本と東アジアの漢文説話類
に関する総合的比較研究
5,100
小峯和明(文教大学)
- 文学における近代東アジアの相互交流
4,300
菅原克也(東京大学)
- 1930年代日本における中国人日本留学生の
文学・芸術運動に関する総合的研究
2,900
小谷一郎(埼玉大学)
- 六朝の楽府と楽府詩
2,300
釜谷武志(神戸大学)
- 近代北方中国の芸能に関する総合的研究
—京劇と皮影戯をめぐって—
3,300
水上 正(慶應義塾大学)
- 中国語普通話文法と方言文法の多様性と
普遍性に関する類型論的・認知言語学的研究
2,300
古川 裕(大阪外国語大学)
- 歴史文献データと野外調査データの総合を
目指した漢語方言史研究
1,400
太田 斎(神戸市外国語大学)
- 現代香港広東語の語彙体系とその形成に
かゝる記述的研究
2,800
千島英一(麗澤大学)
- 16世紀以降西洋人の中国語学研究的文獻
に関する調査・研究
1,300
内田慶市(関西大学)
- 東アジア諸語のカテゴリ化と文化化に関
する対照研究—多様性から普遍性へ—
3,900
生越直樹(東京大学)
- 満州語記述文法の作成
2,700
久保智之(九州大学)
- 日本漢字音データベース(大字音表)作成
のための基礎的研究
2,500
湯沢賀幸(筑波大学)
- 非漢字圏外国人学習者の漢字語彙力測定
のための標準テストの開発
1,900
加納千恵子(筑波大学)
- 朝鮮・台湾における植民地支配の制度・機
構・政策に関する総合的研究
4,900
水野直樹(京都大学)
- 中国法制文獻の日本への伝史とその伝存
状況に関する基礎的研究
3,000
坂上康俊(九州大学)

- 日本植民地支配と東アジア—女性史・ジェンダー史の比較的研究 2,700
加藤千香子(横浜国立大学)
- 仁和寺所蔵典籍の研究 1,300
角田文衛(財)古代学協会)
- 中央アジア出土文物から見たシルクロード貿易と文化交流の諸相 2,600
森安孝夫(大阪大学)
- 清朝における漢・蒙・漢の政治統合と文化変容 3,800
楠木賢道(筑波大学)
- 初期コモンウェルスと東アジアに関する歴史文献学 4,700
石川植浩(京都大学)
- 宋代以降の中国における集団とコミュニケーション 2,300
岡 元司(広島大学)
- ハラホト出土文書(モンゴル文)の研究 3,500
吉田順一(早稲田大学)
- 宋代の経済政策及び関連する諸政策の総合的研究 3,100
斯波義信(財)東洋文庫)
- 中国出土鏡の地域別鏡式分布に関する研究 5,000
菅谷文則(滋賀県立大学)
- 東アジア古代都城の苑地に関する基礎的研究 1,800
金子裕之(独立行政法人文化財研究所)
- 東アジアの伝統的「場所表現」による地理思想の「地域論」的研究 1,200
千田 稔(国際日本文化研究センター)
- 19世紀のアジアを描く英国人旅行家の旅行記とその旅に関する歴史地理学的研究 2,300
金坂清則(京都大学)
- 「統合古典籍データベース」(国文学研究資料館)を利用した個別書誌作成の試み 2,700
松野陽一(国文学研究資料館)
- 中国東北部における日本語資料 Network化に関する基礎的研究 5,200
松原孝俊(九州大学)
- 呉語婺州方言群・贛江方言群の調査研究 1,500
秋谷裕幸(愛媛大学)
- 中国東北(満州)をめぐる日本・中国・ロシア関係のロシア未公開史料の調査研究 2,600
井村哲郎(新潟大学)
- 中国国内所蔵敦煌・吐魯番文獻の歴史学的・文献学的研究 1,500
関尾史郎(新潟大学)
- 中華帝国の中央と周縁—現代東アジアの原型を求めて— 3,600
細谷良夫(東北学院大学)
- 中国東北部におけるアルタイ語族の諸民族のシャーマニズムと社会に関する人類学研究 3,100
Peter Knecht(南山大学)

- 中国・東南アジア大陸部の国境地域における諸民族文化の動向に関する人類学的調査研究 4,200
塚田誠之(国立民族学博物館)
- 民族文化の境界領域に関する文化力学的研究—中国西域少数民族の場合— 1,800
丸山孝一(福岡女学院大学)
- 中国雲南のペー族を中心とするエスニシティの変動に関する人類学的研究 1,500
横山広子(国立民族学博物館)
- 海南島の地方文化に関する文化人類学的研究 1,400
瀬川昌久(東北大学)
- 中国少数民族のエスニック・アイデンティティの人類学的研究 4,100
山路勝彦(関西学院大学)

基盤研究(C) 新規

- 清代における幕府と学術の関係について 1,600
水上雅晴(北海道大学)
- 宋元時代の儒教と道教との交渉についての研究 1,300
小島 毅(東京大学)
- 近代中国における国学の研究 1,300
末岡 宏(富山大学)
- 唐代道教関係石刻史料の研究 1,100
神塚淑子(名古屋大学)
- 『天主実義』とその思想的影響に関する研究 1,200
柴田 篤(九州大学)
- 上海博物館蔵戦国楚竹書を中心とした新出土文字資料による戦国儒家思想史の研究 600
末永高康(鹿児島大学)
- 朱子学の正統論・道統論とその東アジアの展開 1,000
土田健次郎(早稲田大学)
- 大東涅槃經系三昧教典の研究—方等泥洹経を中心として— 1,400
下田正弘(東京大学)
- 日中近代哲学における仏教受容—京都学派と新儒家を中心として— 1,800
末本文美士(東京大学)
- 中国西南の宗教演劇職能集団に伝承される道教およびシャーマニズム儀礼文獻の研究 2,600
森由利亜(早稲田大学)
- 中国東魏・北齊時代仏教美術にみられる先進性と保守性について 1,300
八木春生(筑波大学)
- 日本古典和歌における中国文学受容についての通時的研究 2,200
芳賀紀雄(筑波大学)
- 漢籍の読書抄記—近世中期上方人文社会に即して— 1,300
稲田篤信(東京都立大学)

- 1930年代台湾文学における日本プロレタリア文学の影響 500
四方田千恵(垂水千恵)(横浜国立大学)
- 宝巻の研究—宗教文芸としての視点から— 900
小南 一郎(京都大学)
- 『説文解字繁傳』データベースの構築 1,700
坂内千里(大阪大学)
- 成化本『白兔記』についての基礎的研究 2,000
高橋文治(大阪大学)
- 宋代を中心とする中国の別集編纂に関する文学論的・社会文化論的研究 700
浅見洋二(大阪大学)
- オンライン中国20世紀文学辞典の完成と充実 1,400
青野繁治(大阪外国語大学)
- 民国翻訳史における西洋近代文芸論受容に果たした日本知識人の著作に関する基礎的研究 1,000
工藤貴正(大阪教育大学)
- 中国桂林の岩洞内に存する唐宋人の墨書と石刻の解読及びその史的研究 2,100
戸崎哲彦(島根大学)
- 歌唱形式の宣講による民衆啓蒙活動に関する研究 1,100
阿部泰記(山口大学)
- 日本・中国における唐代の著述に関する総合目録作成のための基礎的研究 1,200
孫 猛(早稲田大学)
- 近代から現代における中国語語彙の変遷と社会的変化の関連性—北京語を基軸として— 1,000
藤田益子(新潟大学)
- 戦国秦漢筆記文字の基礎的研究 500
福田哲之(島根大学)
- 中国語のコーパス構築および近世中国語テキストの計量言語学的研究 2,400
遠藤雅裕(中央大学)
- 漢語の変容と音韻変化との関連性についての基礎研究 600
高山知明(金沢大学)
- 中国語母語話者に対する社会科学系専門日本語教育のための教材開発 1,500
五味政信(一橋大学)
- 対照研究の成果を生かした中国語母語話者向け日本語文法教材の開発 1,600
庵 功雄(一橋大学)
- 清朝の官印制度に関する研究 2,100
片岡 一忠(筑波大学)
- 20世紀中国における知識人集団の思想と行動—胡適新文化集団の研究— 2,000
緒形 康(神戸大学)
- 清朝文書システムの研究 900
加藤直人(日本大学)
- 秦簡・楚簡よみみた中国古代の地域文化の研究 1,400
上藤元男(早稲田大学)

- 黒水城出土宋代軍政文書の研究 1,400
近藤一成(早稲田大学)
- 中国・唐宋五代期における沙陀族の動向について
の研究 2,100
石見清裕(早稲田大学)
- 新華僑の社会構造とエスニック・アイデンティティ
に関する研究—神戸市を事例として 1,400
高橋晋一(徳島大学)
- 華僑社会における伝統文化とくに祭祀・芸能
の変容と再編に関する比較研究 1,300
王 維(香川大学)
- 漢字習得における漢字ルビの有効性の解明
1,800
棚橋尚子(奈良教育大学)

基盤研究(C) 継続

- 中国語固有名詞の中日表記対応辞書とその
知的検索支援システムの構築 1,300
横井俊夫(東京工科大学)
- 中国近代における身体についての思想文化
のジェンダー論による分析 800
坂元ひろ子(一橋大学)
- 東アジアにおける儒教思想の倫理思想的
研究—「人倫」概念を手かりに— 600
高島元洋(お茶の水女子大学)
- 「詩」解釈から見た「郭店村楚墓竹簡」と「戦
国楚簡」の成立 600
数 敏裕(岩手大学)
- 国立国会図書館蔵「天台山記」の総合的研究
1,100
薄井俊二(埼玉大学)
- 康有为大同思想の成立とその影響に関する研究
1,300
竹内弘行(名古屋大学)
- 南宋後期における「朱子学」形成の基礎的研究
800
市来津田彦(広島大学)
- 神仙思想の成立に関する研究 700
大形 徹(大阪府立大学)
- 白隠直筆「法華経細註」の研究 500
堀内伸二(財)東方研究会)
- 華嚴経入法界品梵文原典の批判的校訂と現
代語訳のもとづく華嚴経の新解釈 1,000
田村智淳(宮崎大学)
- 仏教辞典の電子化とインタネト掲載 700
Albert Muller(東洋学園大学)
- チベット仏教におけるラマリズム思想の基盤に
関する研究 600
望月海慧(身延山大学)
- 日本近世における老荘思想の解釈に関する研究
500
大野 出(愛知県立大学)
- イスラーム存在一性論の中国回教思想にお
ける受容と展開 800
松本耿郎(英知大学)

- 「萬葉集」から中古の和歌文学における中国
文学受容史の研究 500
大谷雅夫(京都大学)
- 唐話辞書の発展・系統史の研究—唐通事・異
国通詞諸家の翻訳語彙の検討— 1,500
岩本太一(長崎大学)
- 上代文学に与えた六朝文学・仏典の影響に
ついての考察 700
瀬間正之(上智大学)
- 菅原道真の漢詩の注釈および書誌学的研究
800
柳澤良一(金沢学院大学)
- 中国魏晋南北朝の修辭文学における形似表
現と女字表現の分析及び相互関連に関する研究
1,000
佐竹保子(東北大学)
- 毛沢東様式に関する総合的研究 500
牧 陽一(埼玉大学)
- 南宋・金・元代文学の総合的研究 1,100
金 文京(京都大学)
- 瀬戸内海地域の近世漢学者上甲振洋の漢
文紀行日記についての研究 300
狩野充徳(広島大学)
- 中国「早期話劇」における日本演劇の影響 900
飯塚 容(中央大学)
- 清末・民国初期の巷間資料による庶民文化
流通形態の研究 500
岡崎由美(早稲田大学)
- 中国語圏における漫画文化の研究 500
目下みどり(九州大学)
- 文学テクストにおける近現代中国の旗人像
の変遷 500
長井裕子(北海道大学)
- 中国の童蒙教訓書に関する研究 600
伊藤美重子(お茶の水女子大学)
- 江戸期における詩経解釈学史の基礎的研究—
詩経関係書目及び解題作成と解釈学史の考察
1,200
江口尚純(静岡大学)
- 中国文学における「友情」のかたち 1,500
川合康二(京都大学)
- 中国近代文化史研究—中国近代の自己デ
ザイン 500
遊佐 徹(岡山大学)
- 唐代の芸能・行事と伝奇小説の相互関係の解明
1,400
岡本不二明(岡山大学)
- 「文選」李善注を活用した文学言語の創作
に関する研究 600
富永一登(広島大学)
- 中国映画文化史の基礎的研究 700
張 新民(大阪市立大学)
- 阮籍・嵇康の受容から見た、六朝詩文にお
ける言志の伝統と表現営為の意味 700
大上正美(青山学院大学)

- 次世代中国古典文献データベース構築の
基礎的研究 700
村越貴代美(慶應義塾大学)
- 中国に入つた日本文学の翻訳のあり方—夏
目漱石から村上春樹まで— 800
渡辺新一(中央大学)
- 北宋後期～末期における士大夫の文藝とメ
ディア 500
内山精也(早稲田大学)
- 宋代文献資料による唐代音楽の研究 500
中 純子(天理大学)
- 中国語の「構文」カテゴリーと事態認識に関す
る研究 900
木村英樹(東京大学)
- 漢語諸方言における語声調の実験音声学
的研究 800
岩田 礼(愛知県立大学)
- 苗瑠語と周辺諸言語の言語地理学的研究
800
田口善久(千葉大学)
- 日本語と中国語のとりたて表現の数量的側
面に関する認知的対照研究 900
定通利之(神戸大学)
- 中期蒙古語における外来的要素が言語構
造に及ぼした影響の研究 900
樋口康一(愛媛大学)
- 契丹文字と女真文字の歴史言語学的研究
900
吉本智慧子(立命館アジア太平洋大学)
- テキスト構造の中日対照研究—言語と思维
の相関関係を探る 1,100
大滝幸子(金沢大学)
- 擬似漢字の字形集合に関する情報理論的研究
800
鹿島英一(九州大学)
- 呉語読本「音声データ」の作成と公開 1,300
石 汝杰(九州大学)
- 日中・琉中対音資料による中国語音韻史の
総合的研究 500
丁 鋒(熊本学園大学)
- 台湾原住民諸語の形態・統語に関する類型
論的研究 800
片桐真直(岡山大学)
- 中国語発音に基づく中国地名・人名の仮名
表記とその体系化に関する研究 1,300
陳 淑梅(東京工科大学)
- 日本漢文資料としての聖書類の基礎的研究
—平安時代書写文獻を中心として— 600
山本真吾(三重大学)
- 「雅俗幼学新書」のデータベース化及び唐
話辞書・対訳辞書等との比較研究 500
坂詰力治(東洋大学)
- 明清白話(口語体)小説の近世日本における翻
訳を通じた近世中国語の用例と受容の研究 500
小田切文洋(日本大学)

- 中国語・朝鮮語話者の日本語漢語語彙の学習を支援するための基礎的研究 500
大島中正(同志社女子大学)
- 中国語系日本語学習者の漢字の意味的ネットワークと漢字熟語の習得 1,400
玉岡賀津雄(広島大学)
- 日本語中上級学習用マルチメディア素材のデータベース化及び中国での利用展開 1,400
西都仁朗(東京都立大学)
- 中国語圏における遠隔授業に見られる異文化交流の新しい可能性と問題点 600
牧田英二(早稲田大学)
- 日本古代漢籍受容史の研究 400
榎本淳一(工学院大学)
- 「入唐求法巡礼行記」に関する文献校定および基礎的研究 800
佐藤長門(国学院大学)
- 中国明清時代の民間宗教と文化・社会構造 700
浅井 紀(東海大学)
- 「王禎農書」に見える中国伝統農具の総合的研究 400
渡部 武(東海大学)
- 日中戦争期における上海に関する総合的研究 700
高綱博文(日本大学)
- 19世紀前半の中国辺境社会における移住、民族関係と民間宗教 1,000
菊池秀明(国際基督教大学)
- 清代回民の新疆移住史の研究 800
華 立(大阪経済法科大学)
- 高麗末期から李朝初期における対明外交儀礼の基礎的研究 700
桑野栄治(久留米大学)
- 近現代台湾における宗教儀礼・宗教職能者の歴史学的文献学的研究 1,600
松本浩一(筑波大学)
- 「海東諸国記」研究—「本の歴史」から見る東アジア対外関係史 900
Robinson Kenneth(国際基督教大学)
- 近世中国の接境地帯における物流・人口往来・言語問題 1,200
川越泰博(中央大学)
- 祠廟の記録を主史料とした唐中期～南宋期の王朝権力と地域社会の連関構造に関する研究 600
須江 隆(日本大学)
- 宋代司法機構の総合的研究 1,100
梅原 郁(就実大学)
- 「通典」礼にみえる杜佑の議論の研究 500
北川俊昭(富山商船高等専門学校)
- 琉球列島先史文化と環中国海地域の比較研究 900
後藤雅彦(琉球大学)

- 考古出土物と祭祀儀礼・芸能よりみる中国基層文化の研究 800
稲畑耕一郎(早稲田大学)
- 台湾先住民における「民族」概念の形成に関する文化人類学的研究 700
草場英子(原 英子)(岐阜市立女子短期大学)
- 改革期の中国におけるメディア分野の市場経済化と報道改革—新聞・テレビを中心に— 1,000
唐 亮(横浜市立大学)
- 中国近代土地関係文書の数量的分析とデータベースの作成 1,100
夏井春喜(北海道教育大学)
- 中国広告史—伝統広告とマスメディアの歴史の変遷 1,400
大塚賢龍(甲子園大学)
- 近世日本における外国語教育史の基礎的研究—中国語教育を中心として— 600
朱 全安(千葉商科大学)
- 旧江州における植民地教育体験者の調査 500
竹中憲一(早稲田大学)

研究成果公開促進費

- 中国仏教美術と漢民族化 2,700
八木春生(筑波大学)
- 宋代天台教学の研究 2,100
林 鳴宇(東京電気大学)
- 台密教学の研究 1,900
大久保良峻(早稲田大学)
- 秦漢儒教の研究 3,100
齋木哲郎(鳴門教育大学)
- 大凉山彝族における葬送儀礼と靈魂観を通して見た帰属集団意識の形成 1,900
樊 秀麗(広島大学)
- 王國維の生涯と学問 2,600
佐藤武敏(大阪市立大学)
- 中国城郭都市社会史研究 3,000
川勝 守(大正大学)
- 北京遷都の研究 1,900
新宮 学(山形大学)
- 元代知識人と地域社会 1,200
森田憲司(奈良大学)
- 現代日本語の漢語動名詞の研究 1,700
小林英樹(群馬大学)
- 黄雲芝物語—ある日本文台湾作家の軌跡 1,000
岡崎郁子(吉備国際大学)
- 包公伝説の形成と展開 1,800
阿部泰記(山口大学)
- 楊貴妃文学史研究 1,300
竹村則行(九州大学)
- ジェンダーからみた中国の家と女 1,300
野村鮎子(奈良女子大学)

- 吴语处方言(西北片)古音构 700
秋谷裕幸(愛媛大学)
- 五山文学の研究 1,900
齋 恩慈(福岡国際大学)
- 中日の形容詞における比喩的表現の対照研究 1,000
尤 東旭(新潟大学)
- 漢字(第1巻、第2巻、第3巻) 9,200
清水凱夫(立命館大学)
- 日中比較による異文化適応の実際 800
吉 汎洪(広島市立大学)
- 中国における言論の自由 1,400
石塚 迅(一橋大学)
- 「大正新脩大藏経」テキストデータベース(SAT) 51,800
下田正弘(大藏経テキストデータベース研究会)
- インド学仏教学論文データベース(INBUDS) 4,000
木村清孝(日本印度学仏教学会)
- 早稲田大学図書館所蔵中国年画データベース作成(CYNPD) 5,500
深澤良彰
(早稲田大学図書館所蔵中国年画データベース作成委員会)
- 「東洋学文献目録」データベース(ABOS) 10,600
井波陵一(中国学データベース作成委員会)
- 全国漢籍データベース(KANSEKI) 20,500
高田時雄(全国漢籍データベース作成委員会)
- 東洋学総合情報システム(CISAS) 12,200
斯波義信(東洋文庫電算化委員会)
- 日本現在朝鮮古書データベース(DOKB) 3,300
藤本幸夫
(富山大学朝鮮古書データベース作成チーム)
- 中国近現代文学関係雑誌記事データベース(DJAMCL) 1,300
尾崎文昭
(中国近現代文学関係雑誌記事 DB 作成WG)
- 「東洋文庫所蔵」図像史料マルチメディアデータベース(Multimedia DB of Toy) 13,500
小野欽司
(図像史料マルチメディア DB 作成委員会)
- 中国語音声教育データベース(EDCP) 18,100
湯山トミ子
(中国語音声教育データベース作成委員会)
- 東洋文化研究所蔵漢籍目録データベース(CCC) 6,500
大木 康(漢籍目録データベース作成グループ)
- より適切な漢字処理のための基礎データベース(KanjiDB) 4,600
師 茂樹(禅デジタルアーカイブ作成委員会)

日本中国学会 平成14年(2002年)度 収支決算書

(単位：円)

科 目	予 算	決 算	摘 要
1. 前年度繰越	¥5,802,324	¥5,802,324	—
2. 会員会費	¥12,650,000	¥11,232,930	¥-1,417,070
3. 寄付金	¥1,000,000	¥1,053,150	¥53,150
4. 預金利息	¥2,500	¥592	¥-1,908
5. 著作権料分配金	¥0	¥0	¥0
合 計	¥19,454,824	¥18,088,996	¥-1,365,828

科 目	予 算	決 算	摘 要
1. 事務局総務費	¥2,810,000	¥3,158,888	(1)~(7) ¥-348,888
(1) 印刷費	¥1,000,000	¥1,268,230	¥-268,230
(2) 通信費	¥900,000	¥1,064,672	¥-164,672
(3) 交通費	¥50,000	¥81,760	計開札・振替用紙・伝票等 ¥-31,760
(4) 消耗品費	¥200,000	¥269,905	たばこ26926を含む ¥-69,905
(5) 庶務処理費	¥200,000	¥6,010	¥193,990
(6) 雑費	¥250,000	¥258,311	振込手数料1477円外費を含む ¥-8,311
(7) 業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会 ¥0
2. 事務局人件費	¥2,160,000	¥2,043,500	(1)~(2) ¥116,500
(1) 停事手当	¥1,080,000	¥1,080,000	3000×12×月×3名 ¥0
(2) 謝金	¥1,080,000	¥963,500	専断(1)・役員大会司 52 ¥116,500
3. 事務局会議費	¥900,000	¥650,324	(1)~(2) ¥249,676
(1) 会議費	¥300,000	¥84,844	¥215,156
(2) 役員旅費	¥600,000	¥565,480	¥34,520
4. 事業費	¥7,150,000	¥7,378,468	(1)~(2)~(3) ¥-228,468
(1) 学会報等刊行費	¥5,650,000	¥6,026,248	¥-376,248
イ 印刷費	¥3,800,000	¥4,142,250	学会報 ¥-342,250
ロ 編集費	¥1,300,000	¥1,300,000	¥0
ハ 翻訳謝金	¥150,000	¥150,000	¥0
ニ 発送費	¥400,000	¥433,998	安道印刷業務委託 ¥-33,998
(2) 学術大会運営費	¥1,200,000	¥1,200,000	¥0
(3) マルチメディア事業費	¥300,000	¥152,220	¥147,780

科 目	予 算	決 算	摘 要
5. 各種委員会運営費	¥1,870,000	¥1,382,251	(1)~(6) ¥487,749
(1) 大会委員会	¥80,000	¥10,000	¥70,000
イ 通信費	¥10,000	¥10,000	¥0
ロ 会議・旅費	¥50,000	¥0	¥50,000
ハ 謝金	¥10,000	¥0	¥10,000
ニ 消耗品・雑費	¥10,000	¥0	¥10,000
(2) 論文審査委員会	¥570,000	¥509,476	¥60,524
イ 通信費	¥120,000	¥133,880	¥-13,880
ロ 会議・旅費	¥350,000	¥318,530	¥31,470
ハ 謝金	¥80,000	¥24,000	¥56,000
ニ 消耗品・雑費	¥20,000	¥33,866	¥-13,866
(3) 出版委員会	¥340,000	¥327,173	¥12,827
イ 通信費	¥10,000	¥15,790	¥-5,790
ロ 会議・旅費	¥250,000	¥235,220	¥14,780
ハ 謝金	¥30,000	¥30,000	¥0
ニ 会報編集費	¥40,000	¥40,000	編集補助費20000×2 ¥0
ホ 消耗品・雑費	¥10,000	¥6,163	¥3,837
(4) 選挙管理委員会	¥80,000	¥150,630	¥-70,630
イ 通信費	¥10,000	¥0	¥10,000
ロ 会議・旅費	¥30,000	¥56,630	¥-26,630
ハ 謝金	¥30,000	¥94,000	¥-64,000
ニ 消耗品・雑費	¥10,000	¥0	¥10,000
(5) 研究推進・国際交流委員会	¥400,000	¥63,185	¥336,815
イ 通信費	¥10,000	¥1,020	¥8,980
ロ 会議・旅費	¥350,000	¥56,750	¥293,250
ハ 謝金	¥30,000	¥5,000	¥25,000
ニ 消耗品・雑費	¥10,000	¥415	¥9,585
(6) 将来計画特別委員会	¥400,000	¥321,787	¥78,213
イ 通信費	¥10,000	¥1,980	¥8,020
ロ 会議・旅費	¥350,000	¥289,212	¥60,788
ハ 謝金	¥30,000	¥30,000	¥0
ニ 消耗品・雑費	¥10,000	¥595	¥9,405
予備費	¥4,564,824	—	1~5 ¥276,569
次年度繰越金	—	¥3,475,565	
合 計	¥19,454,824	¥18,088,996	

学会基金

基本金	4,300,000	基本金	4,300,000	備考
前年度繰越金	¥835,621	日本中国学会賞	¥160,000	奥野基金 500,000
普通預金利息	¥342	次年度繰越金	¥681,919	佐藤基金 200,000
信託収益金	¥5,956			池田基金 300,000
				伊藤基金 300,000
合 計	¥841,919	合 計	¥841,919	積立基金 3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

平成15年5月17日

日本中国学会監事


 藤井名三

 戸倉英美

 団伸一

日本中国学会 平成15年(2003年)度収支予算案

(単位:円)

収入の部	科目	予算案
	1. 前年度繰越	
2. 会費		¥12,000,000
3. 寄付金		¥1,000,000
4. 預金利息		¥1,000
5. 著作権料分配金		¥0
	合計	¥16,476,565

支出の部	科目	予算案
	1. 事務局総務費	
(1) 印刷費		¥1,200,000
(2) 通信費		¥1,000,000
(3) 交通費		¥50,000
(4) 消耗品費		¥200,000
(5) 庶務処理費		¥100,000
(6) 雑費		¥250,000
(7) 業務委託料		¥210,000
2. 事務局人件費		¥1,860,000
(1) 幹事手当		¥360,000
(2) 謝金		¥1,500,000
3. 事務局会議費		¥700,000
(1) 会議費		¥100,000
(2) 役員旅費		¥600,000
4. 事業費		¥7,300,000
(1) 学会報等刊行費		¥5,950,000
イ 印刷費		¥3,800,000
ロ 編集費		¥1,600,000
ハ 翻訳謝金		¥150,000
ニ 発送費		¥400,000
(2) 学術大会運営費		¥1,200,000
(3) マルチメディア事業		¥150,000

支出の部	科目	予算案
	5. 各種委員会運営費	
(1) 大会委員会		¥15,000
イ 通信費		¥5,000
ロ 会議・旅費		¥0
ハ 謝金		¥5,000
ニ 消耗品・雑費		¥5,000
(2) 論文審査委員会		¥600,000
イ 通信費		¥140,000
ロ 会議・旅費		¥400,000
ハ 謝金		¥30,000
ニ 消耗品・雑費		¥30,000
(3) 出版委員会		¥310,000
イ 通信費		¥10,000
ロ 会議・旅費		¥180,000
ハ 謝金		¥30,000
ニ 会報編集費		¥80,000
ホ 消耗品・雑費		¥10,000
(4) 選挙管理委員会		¥30,000
イ 通信費		¥5,000
ロ 会議・旅費		¥10,000
ハ 謝金		¥10,000
ニ 消耗品・雑費		¥5,000
(5) 研究推進・国際交流委員会		¥130,000
イ 通信費		¥5,000
ロ 会議・旅費		¥100,000
ハ 謝金		¥20,000
ニ 消耗品・雑費		¥5,000
(6) 将来計画特別委員会		¥340,000
イ 通信費		¥5,000
ロ 会議・旅費		¥300,000
ハ 謝金		¥30,000
ニ 消耗品・雑費		¥5,000
予備費		¥2,181,565
次年度繰越金		—
	合計	¥16,476,565

学会基金

収入の部	基本金	4,300,000	支出の部	基本金	4,300,000	備考	奥野基金	500,000
	前年度繰越金	¥681,919			日本中国学会費		¥160,000	
普通預金利息	¥500		次年度繰越金	¥527,419		池田基金	300,000	
信託収益金	¥5,000					伊藤基金	300,000	
合計	¥687,419		合計	¥687,419		積立基金	3,000,000	

「日本中国学会会則」の改正案（第2次案）について

平成15年10月5日

将来計画特別委員会委員長 池田 知久

日本中国学会会則改正案（第2次案）

改正案	現行会則																						
<p>第1条 <u>〔名称〕</u>本会は日本中国学会と称する。</p> <p>第2条 <u>〔目的〕</u>本会は中国に関する学術の研究と普及および会員相互の親睦を図ることを目的とする。</p> <p>第3条 <u>〔事業〕</u>本会はその目的を達するために次の事業を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 毎年1回学術大会の開催 2. 学会機関誌およびその他刊行物の発行 3. 海外における中国学術団体との交流 4. 会員の研究に対する援助 5. 斯学の啓蒙と普及 6. その他必要な事項 <p>第4条 <u>〔会員の名称〕</u>本会の会員は次の6種とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 通常会員 普通会員と特別会員とがある。 特別会員とは会員歴30年以上で前年度内において満80歳に達したものを。 2. 賛助会員 3. 国外会員 4. 客員会員 5. 準会員 <p>第5条 <u>〔会員の定義〕</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 通常会員は斯学を攻究するものとする。 2. 賛助会員は斯学を賛助するものとする。 3. 国外会員は外国に定住して斯学を攻究するものとする。ただし一時的な在在の場合は含まない。 4. 客員会員は本会が招聘する学術上の功績が顕著なものとする。 5. 準会員は斯学に関係ある大学・研究機関とする。 <p>第6条 <u>〔入会等〕</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 客員会員を除き会員の入会は通常会員または国外会員1名の紹介により理事会において審議・法定し、評議員会の承認を得る。 2. 客員会員の推薦については別に定める。 <p>第7条 <u>〔経費〕</u>本会の経費は会費・寄付金およびその他の収入をこれに充てる。</p> <p>第8条 <u>〔会費〕</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 会員は下記会費を年度始めに納入するものとする。 2. ただし顧問・客員会員および特別会員はこれを免除する。 <table border="0"> <tr> <td>通常会員</td> <td></td> </tr> <tr> <td>普通会員</td> <td>7,000円</td> </tr> <tr> <td>賛助会員</td> <td>111(10,000円)以上</td> </tr> <tr> <td>国外会員</td> <td>7,000円</td> </tr> <tr> <td>準会員</td> <td>7,000円</td> </tr> </table>	通常会員		普通会員	7,000円	賛助会員	111(10,000円)以上	国外会員	7,000円	準会員	7,000円	<p>第1条 本会は日本中国学会と称する</p> <p>第2条 本会は中国に関する学術の研究及び会員相互の親睦を計ることを目的とする</p> <p>第3条 本会はその目的を達するために次の事業を行う</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 毎年1回学術大会の開催 2. 学会機関誌及びその他刊行物の発行 3. 海外における中国学術団体との交流 4. 会員の研究に対する援助 5. その他必要な事項 <p>第4条 本会の会員は次の7種とする</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 通常会員 普通会員と特別会員とがある 特別会員とは会員歴30年以上で前年度内において満80歳に達したものを 2. 賛助会員 3. 外国人留学生会員 4. 国外会員 5. 客員会員 6. 準会員 <p>第5条</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 通常会員は斯学を攻究するものとする 2. 賛助会員は斯学を賛助するものとする 3. 外国人留学生会員は外国籍であつて日本の大学院の学生であるものとする 4. 国外会員は外国に定住して斯学を攻究するものとする ただし一時的な在在の場合は含まない 5. 客員会員は本会が招聘する学術上の功績が顕著なものとする 6. 準会員は斯学に関係ある大学・研究機関とする <p>第6条</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 客員会員を除き会員の入会は通常会員または国外会員1名の紹介により理事会において審議して仮に会員として承認し正式には評議員会の承認を得ることを要する 2. 客員会員の推薦については別に定める <p>第7条 本会の経費は会費・寄付金及びその他の収入をこれに当てる</p> <p>第8条</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 会員は下記会費を年度始めに納入するものとする 2. ただし顧問・客員会員及び特別会員はこれを免除する <table border="0"> <tr> <td>通常会員</td> <td></td> </tr> <tr> <td>普通会員</td> <td>7,000円</td> </tr> <tr> <td>賛助会員(原則的には法人)</td> <td>111(10,000円)以上</td> </tr> <tr> <td>外国人留学生会員</td> <td>5,000円</td> </tr> <tr> <td>国外会員</td> <td>7,000円</td> </tr> <tr> <td>準会員</td> <td>7,000円</td> </tr> </table>	通常会員		普通会員	7,000円	賛助会員(原則的には法人)	111(10,000円)以上	外国人留学生会員	5,000円	国外会員	7,000円	準会員	7,000円
通常会員																							
普通会員	7,000円																						
賛助会員	111(10,000円)以上																						
国外会員	7,000円																						
準会員	7,000円																						
通常会員																							
普通会員	7,000円																						
賛助会員(原則的には法人)	111(10,000円)以上																						
外国人留学生会員	5,000円																						
国外会員	7,000円																						
準会員	7,000円																						

改正案	現行会則
<p>第9条 <u>（会員の権利）</u></p>	<p>第9条</p>
<p>1. 通常会員・外国会員は本会定期刊行物の頒布を受け大会等に出席し、また会誌およびその他において研究を発表することができる。</p> <p>2. 賛助会員・準会員は本会定期刊行物の頒布を受けることができる。</p> <p>3. 客員会員は本会定期刊行物の寄贈を受ける。</p>	<p>1. 通常会員・外国人留学生会員・外国会員は本会定期刊行物の頒布を受け集会に出席しまた会誌及びその他において研究を発表することができる。</p> <p>2. 賛助会員・準会員は本会定期刊行物の頒布を受けることができる。</p> <p>3. 客員会員は本会定期刊行物の寄贈を受ける。</p>
<p>第10条 <u>（役員）</u>本会は次の役員を置く。</p>	<p>第10条 本会は次の役員を置く</p>
<p>1. 理事長 1名</p> <p>2. 副理事長 2名</p> <p>3. 理事 若干名</p> <p>4. 監事 若干名</p> <p>5. 評議員 60名</p> <p>6. 顧問 若干名</p> <p>7. 幹事 若干名</p> <p>8. 各種委員会委員 若干名</p>	<p>1. 理事長 1名</p> <p>2. 副理事長 2名</p> <p>3. 理事 若干名(ただし10名を越えない)</p> <p>4. 監事 若干名</p> <p>5. 評議員 若干名</p> <p>6. 顧問 若干名</p> <p>7. 幹事 若干名</p> <p>8. 各種委員 若干名</p>
<p>第11条 <u>（役員の出選・委嘱）</u></p>	<p>第11条</p>
<p>1. 評議員は通常会員の互選による。</p> <p>2. 理事長は評議員の互選による。</p> <p>3. 副理事長および理事は評議員の中から理事長が委嘱し、評議員会の承認を得る。</p> <p>4. 監事は理事長および理事を除く評議員の互選による。</p> <p>5. 顧問は評議員会の定めるところにより評議員会が推薦する。</p> <p>6. 幹事および各種委員会委員は理事長の委嘱による。</p>	<p>1. 評議員は通常会員の互選による</p> <p>2. 理事長は評議員の互選による</p> <p>3. 副理事長及び理事は評議員会の承認を得て評議員の中から理事長が委嘱する</p> <p>4. 監事は理事長及び理事を除く評議員の互選による</p> <p>5. 顧問は評議員会の定めるところにより評議員会が推薦する</p> <p>6. 幹事及び各種委員は理事長の委嘱による</p>
<p>第12条 <u>（役員の仕事）</u></p>	<p>第12条</p>
<p>1. 理事長は本会を代表して理事会を組織し会務を統べる。</p> <p>2. 副理事長は理事長を補佐し、理事長に事故ある時は副理事長がその任を代行する。</p> <p>3. 理事は理事長の委嘱を受けて理事会を構成し、会務を掌る。</p> <p>4. 監事は監事会を構成し、経理を監査する。ただし、監事会については別に定める。</p> <p>5. 評議員は評議員会を構成し、理事会による本会の運営について審議・決定・委任する。ただし、評議員会については別に定める。</p> <p>6. 顧問は随時理事長の諮問に応ずる。</p> <p>7. 幹事は会務を処理する。</p> <p>8. 各種委員会委員は会員に限られ、理事会の委嘱を受けて各種委員会を構成し、会務を立案執行する。ただし、委員会および委員については別に定める。</p>	<p>1. 理事長は本会を代表して理事会を組織し会務を統べる</p> <p>2. 副理事長は理事長を補佐し、理事長に事故ある時は副理事長がその任を代行する</p> <p>3. 理事は理事長の委嘱を受けて理事会を構成し会務を掌る</p> <p>4. 監事は監事会を構成し経理を監査する。ただし監事会については別に定める</p> <p>5. 評議員は評議員会を構成し、理事会による本会の運営について審議・決定する。ただし評議員会については別に定める</p> <p>6. 顧問は随時理事長の諮問に応ずる</p> <p>7. 幹事は会務を処理する</p> <p>8. 各種委員は会員に限られ、理事会の委嘱を受けて各種委員会を構成し会務を立案執行する。ただし委員会および委員については別に定める</p>
<p>第13条 <u>（役員任期）</u></p>	<p>第13条</p>
<p>1. 役員(顧問を除く)の任期は二年とし重任することができる。</p> <p>2. ただし、理事長は連続三任はできない。</p> <p>3. 役員(顧問を除く)は満70歳を超えて在任できない。</p> <p>4. ただし、年度の途中で満70歳に達した役員は当該年度末日まで在任するものとする。</p> <p>5. 顧問の任期は終身とする。</p>	<p>1. 役員(顧問を除く)の任期は二年とし重任することができる</p> <p>2. ただし、理事長は連続三任はできない</p> <p>3. 役員(顧問を除く)は満70歳を超えて在任できない</p> <p>4. ただし、年度の途中で満70歳に達した役員は当該年度末日まで在任するものとする</p> <p>5. 顧問の任期は終身とする</p>
<p>第14条 <u>（会計年度）</u>本会の会計年度は毎年4月に始まり翌年3月に終わる。</p>	<p>第14条 本会の会計年度は毎年4月に始まり翌年3月に終わる</p>
<p>第15条 <u>（臨時評議員会の開催）</u>全通常会員数の100分の5以上が評議員会開催を要求した場合、理事長は随時評議員会を開催しなければならない。</p>	<p>第15条 全会員数の100分の5以上が評議員会開催を要求した場合理事長は随時評議員会を開催しなければならない</p>
<p>第16条 <u>（会員総会）</u>理事会は会員総会を年に一回開催して会員に会務を報告すると共に、会員の自由な提案を受けねばならない。</p>	<p>第16条 理事会は会員総会を年に一回開催して会員に会務を報告すると共に会員の自由な提案を受けねばならない</p>
<p>第17条 <u>（会則変更）</u>本会則の変更は理事会の議を経て、評議員会において全評議員の3分の2以上の賛成をもって決定する。</p>	<p>第17条 本会則の変更は評議員会の議を経て通常会員・外国人留学生会員および外国会員の全会員の投票による</p>

【解説】

改正の重点は、下記の3点であります。

(1)「外国人留学生会員」を廃止してそれを「通常会員」として扱い、また会費も5,000円を「通常会員」の7,000円とする。それと同時に現会則では、「外国人留学生会員」に役員（評議員・理事長など）選挙の選挙権・被選挙権が与えられていない状態を、改正する。

※「外国人留学生会員」の経済的困窮度と日本人大学院生の経済的困窮度との格差は、今日、以前ほど大きくはなくなってきている。また、役員選挙の選挙権・被選挙権は、本来「外国人留学生会員」も「通常会員」と平等に有すべきものである。

(2)「評議員」の定数は、現会則では「若干名」となっている。これを「60名」に改める。

※現会則実施後も、会員総数が増加していること、評議員選挙の際、各地区選出者を一層重視しなければならないこと、女性の評議員参加をさらに促進する必要があること、などのためである。

(3)「会則の変更」の手続きは、現会則では「評議員会の議を経て通常会員・外国人留学生会員及び国外会員の全会員の投票による」となっている。これを「理事会の議を経て、評議員会において全評議員の3分の2以上の賛成をもって決定する」に改める。

※現会則の手続きは、多くの時間・労力・費用を必要とし、会則変更が相当に困難である。会則変更は当然慎重を期すべきであるが、同時に、状況の変化に応じて必要な改正ができるような仕組みになっていることが望ましい。

また、現評議員会規約によれば、評議員会は、本会の最高議決機関であり、会則変更を議決するのにふさわしい機関である。

また、改正案は「全評議員の3分の2以上」という高いハードルを設けており、安易に会則変更ができない仕組みである。

【経緯】

将来計画特別委員会は、「委員会規約」の3の(6)にa「新会則施行後、問題点の検討」と決められている「任務」に基づいて、平成14年4月より約1年半の間、重点的に、新会則（平成11年4月より完全実施）の問題点の検討を行ってきました。

この件については、多くの会員の皆様のご意見をこの検討に反映させるために、平成14年10月の会員総会において興膳宏理事長より、会員の皆様がお気づきになった会則についての問題点やご意見をお寄せ下さい、という提案がなされました。また、「日本中国学会便り」第2号（平成14年12月発行）に、「「会則」の問題点等の指摘に関する会員各位へのお願い」を掲載して、以上のお願いの趣旨の徹底を計りました。

委員会は、平成15年3月に中間報告案（第1次案）をとりまとめ、「日本中国学会便り」第1号（平成15年4月発行）にそれを掲載いたしました。その後、会員の皆様のご意見や理事会で出された問題点をふまえて、平成15年7月の委員会においてさらに検討を加えた結果、上記のような第2次案を得るに至ったものであります。

【ご意見・問題点の宛先】

郵便：〒113-0034

東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内
日本中国学会将来計画特別委員会委員長

池田知久

FAX：03-3251-4853

E-MAIL: kaisokukaisei@hotmail.com

2004年2月29日（日）までにお問い合わせいたします。

○「研究会の案内」記事募集

来年4月の「学会便り」（4月20日発行予定）から、各種研究会の案内を掲載する予定です。研究会の名称、開催日時・場所、連絡先などを出版委員までお知らせ願います。

訂正

2003年（平成15年）4月20日第1号
「中国近世語学会」

・4頁左上から14行目

「事務局は発足以来」の後に、「筑波大学に置かれ、現在は」を入れる。

・5頁右下から5～6行目

「必ずしも」→「必ずしも」

「日本中国學會報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。
ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはA4、1行30字毎ページ40行、文字は10.5ポイントを用い、400字詰原稿用紙に換算した全体の枚数を第1ページの見易い場所に明記すること。
5. 図版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示すること。
ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。
校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。
原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、調点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は正漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を正漢字体（旧字）に統一する。
活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントを使用する。
特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所を明記すること。

9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いないこと。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあつては、ウェード式・漢語拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例 孫逸仙 Sun Yatsen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。
日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、400字3枚（1200字）程度の日本語要旨を添付すること。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内
日本中国学会
14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想または文学・語学）の別を原稿第1ページに朱書すること。ただし、論文の内容により、両部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨とも複製コピーを用意し、計4部を提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。

校正

16. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてののみ認める。加筆・訂正の結果加算された印刷費は、執筆者の負担とすることがある。

抜刷

17. 掲載論文の執筆者に対しては、抜刷30部を贈呈する。抜刷の追加を希望する場合は、初校返送時に追加所要部数を連絡のこと。その分については、実費及び増加送料を本人負担とする。

(昭和62年10月11日制定)

(平成13年5月13日修正)

(平成14年10月13日一部修正)

(平成15年10月5日一部修正)